

日常の指導を見直し、学級の安定を図る！

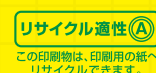
学級担任のための 生徒指導ハンドブック

- 1 はじめに
- 2 学級における生徒指導の基本認識
- 3 学級担任が生徒指導において貫きたい 10 の基本姿勢
- 4 学級担任の生徒指導 HOW TO
学級開き／学級目標づくり／学級組織づくり 当番活動・係活動／席替え／給食指導／清掃指導／
朝の会・帰りの会／授業／学校行事／教室の環境づくり／休み時間／放課後／定期面談（中学校）／
トラブル対応／欠席／連絡帳（小学校）／学級懇談／家庭訪問／学級通信／通信表／職員室
- 5 おわりに
対応に困った時にはぜひ活用を！
参考・引用文献／生徒指導推進委員



学級担任のための
生徒指導ハンドブック

平成 27 年 3 月
仙台市教育委員会 Tel.022-214-8878



この印刷物は、
輸送マイルージ低減によるCO₂削減や
地産地消に着目し、国産米ぬか油を使用した
新しい環境配慮型インキ「ライスインキ」で印刷し、
印刷用の紙へリサイクルできます。

仙台市教育委員会

子どもにとっての学級担任とは

子どもにとっての学級担任とは、どんな存在でしょうか。

それは、子どもの人間形成に大きく影響を及ぼすにもかかわらず、子ども自身が選ぶことのできない運命的な出会いにより始まる存在です。しかも、教育は教師と子どもとの人間的な触れ合いの上に成り立つことから、子どもにとっては、出会う大人の中でも特別な意味を持つ存在と言えます。

一方、学級担任にとって、子どもとの出会いはどんな意味を持つのでしょうか。それは、教師としての喜びややりがいを与えてくれるものです。子どもたちと織りなす一年間の学級生活は、教師としても人間としても自らを成長させてくれます。当然のことながら、問題行動を起こす子どもや反抗的な子どもに出会うこともあります。時には、感情的に避けたくなる子どもがいるかもしれません。その際、そこで投げ出してしまうのか、それとも「運命的な出会い」と考えて精一杯向き合い、そこから何かを学んでいく機会にしようとするのかといった「学級担任としての姿勢」は、教師としての生き方や在り方を大きく左右します。

本来、人間はよりよく生きたいと思う存在です。子どもは、「学級担任の先生と良い関係を築きたい」、「先生に認めてもらいたい」、「愛されたい」と願っています。それを意識しないことがあるかもしれませんが、そのような心を持っているのが子どもです。子どもは、自分としっかりと向き合い、真剣に自分を育ててくれる学級担任(教師)との出会いを求めています。

私たち教師はそのことを信じて、この仕事に情熱をかたむけていきたいものです。



学級担任の「仕事」

一人一人の子どもを理解する「仕事」

学級担任の「仕事」は一人一人を深く理解しようとするところから始まります。子どもへの理解の深さは、子どもへの愛情の深さと同じです。

集団を育てながら、一人一人の子どもを育てる「仕事」

偶然に出会い、集まった集団を“より良い集団”に育てる営みが学級担任の「仕事」です。“より良い集団”は“より良い個”を生み出すものでなければなりません。集団を育て、それを個々の子どもの成長・発達や人間形成につなげていくことが、この「仕事」の最終到達目標です。



技術だけではなく、人間性で導く「仕事」

子どもは、毎日教師の言動に注目し、教師の意図とは無関係に、人間としての教師の生き方を吸収しています。学級担任の「仕事」は、技術だけではなく、にじみ出る人間としての豊かさや温かさなどの人間性を持って当たり、それを示していく「仕事」です。

教育は、教師と子どもの信頼関係の上に成り立ちます。

教育は、教師と子どもとの「信頼」で結ばれた人間関係なしには成立しません。したがって、教育の出発点においては、教師がその子どもの行動や態度、ものの考え方などを「ありのままに」受け入れることが大切です。子どもにとって、「教師から受け入れられる」という安心感は、欠かせないものであり、そこから信頼の基礎がつくられていくからです。

このことは、子どもを甘やかすということではありません。子どもは、この先生は自分の味方であるか敵であるか、先生の愛情は本物かにせ物かを本能的に見分ける“鋭い洞察力”を持っています。ですから、どんなに叱っても信頼される先生もいれば、逆に優しく接してばかりいても、いつも子どもに見透かされてしまう先生もいます。

教育は、教師が子どもを対等な存在として受け止め、「信頼」を築いていくところから始まります。



2 学級における生徒指導の基本認識

生徒指導とは

子どもが自発的かつ主体的に成長・発達していくことを目指して、指導、支援することです。

生徒指導は、単に規則を守らせ、行動の習慣化を求めたり、問題行動への対応をしたりすることを指すものではなく、子ども一人一人が、教師からも集団からも認められ、諸活動に主体的かつ積極的に取り組む中で、自ら成長・発達していくための「自己指導能力」の育成を目指すものです。

「自己指導能力」を育成するために！

「自己指導能力」の育成に当たっては、3つの視点に特に留意し、日々の教育活動を展開することが求められます。

共感的な
人間関係を育むこと
そして、
あなたも大切な存在！

自己存在感を
与えること
私は、かけがえのない
存在なんだ！

自己決定の場を
与えること
私は、自分の行動を
自分で決めて、
その結果を受け止める！



学級における生徒指導

子どもにとっての学級は、学校生活の大部分を過ごす場であり、学校生活の拠点です。

学級は、生徒指導を進める上で基本となる場です。授業をはじめ、学級の様々な活動や場面を機会として、子ども一人一人の生活習慣が形成され、社会的、道徳的資質も育まれていきます。



学級集団づくり

子どもは良い集団の中でこそより良く育ちます！ 学級づくりは学級担任の中心的な仕事です。

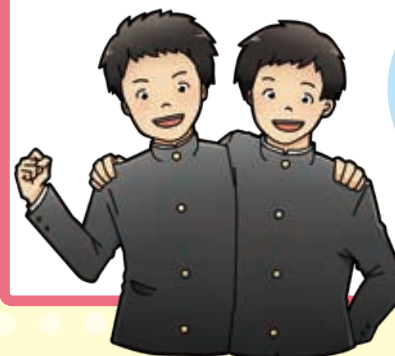
学級集団に支えられて個が育ち、個の成長が学級集団を発展させるという相互作用により、子ども一人一人が大きく成長します。

4月当初の学級は、クラス分けで“偶然生まれた集団”です。その“偶然生まれた集団”が、一人一人の力を合わせた以上の力を発揮できる“チーム”と呼べる集団に成長できるように育てていくことが学級づくりと言えます。

良い学級集団には、ルール（規律）とリレーション（親和的な交わり）がバランス良く保たれています。ルールの確立とは、対人関係における約束や集団での活動の仕方が全員に理解され、行動として学級内に定着していることであり、リレーションの確立とは、触れ合いのある本音の感情交流がある状態のことです。

良い集団とは

ルールとリレーションが確立され、子ども同士が自他の成長のために協力できる集団です。



ルール (規律)

共有する目標がある

一人一人に役割がある

秩序がある

リレーション (親和的な交わり)

認め合う関係がある

互いに助け合う関係がある

本音の感情交流がある

2 学級における生徒指導の基本認識

授業における生徒指導

学習指導と生徒指導は相互に深く関わり合っているため、両者の関連を図りながら指導・支援に当たることが大切です。

授業において、生徒指導の機能を発揮することは、授業に臨む基本的な態度を育てるとともに、子ども一人一人が生き生きと学習に取り組めるようにするという意義があります。また、学習指導と生徒指導の両者の関連を図りながら指導・支援に当たることによって、子ども同士のより良い人間関係の構築や学級への所属感の高まりなどが期待できます。このことは、学級集団と子ども一人一人をより良く成長させることに繋がります。授業は、学校生活の中心であるため、学習指導の場としてだけでなく、生徒指導においても中心となる場面です。



授業における生徒指導の二つの側面

授業における生徒指導には以下の二つの側面があります

- ①学習活動が成立するための基本的な指導 ②学習のねらいの達成に向けた創意工夫ある指導

①学習活動が成立するための基本的な指導

学習環境を整える

学ぶ姿勢を育てる

聴くことを鍛える

協力して学び合う場
を工夫する

互いの良さを認め合う
場を工夫する

学ぶ意義を教える

興味・関心を高める

主体的な学習態度を養う

一人一人に活躍の場を
つくる

②学習のねらいの達成に向けた創意工夫ある指導

児童生徒理解とは

「子どもをどのように理解するか」は、「教師がどのように指導、支援するか」ということにつながります。

互いに理解すること

「児童生徒理解」という言葉を聞くと、教師が一方的に子どもを理解する手立てのことのように感じてしまいがちですが、教師と子どもの関係を対等なものと考え、教師もまた子どもに「理解されている」と言えます。教師は、年下である子どもに対して、人格的にも未熟な者と認識して接してしまいがちです。しかし、子どもは、一人の人間として、大人を見る目や批判する視点を持ち合わせています。



柔軟に理解すること

子どもも大人も、人は常に変化し成長しています。日々様々な刺激を受け、何かを感じ、考え、自分をつくっていきます。昨日の自分は今日の自分と同じではありません。問題を起こしてしまった子どもが、また必ず問題を起こすとは限りません。先入観で固定的に子どもを見るのではなく、どの子どもにも、きっと新しい一面があるという柔軟な気持ちで、子どもを理解していこうとすることが大切です。



多面的に理解すること

例えば、教室で学習する姿は、その子どもの一面ではありますが、それがすべてではありません。学校では教科の授業が大部分を占めますから、目にする姿には、偏りが生じるかもしれません。したがって、休み時間や係活動、当番活動などの多様な場面で子どもを知ろうとすることが大切です。また、一人の視点や物差しだけでは、偏った見方が生じやすくなります。学年の同僚はもちろんのこと、複数の視点を持って、多面的に子どもを理解することが大切です。



近年、どの学級にも発達障害（その可能性も含め）のある児童生徒があり、対応等について、すべての教師が理解し、指導・支援にあたっていくことが求められています。

仙台市教育委員会では、以下の推進資料を発刊しています。教育センターのHPに掲載されていますので、参照ください。

●教職員用「気づいて認めて支えて」平成18年3月 仙台市教育委員会

●平成27年度 特別支援教育推進資料「子どもが輝くために」平成27年3月5日 仙台市教育委員会

3

学級担任が生徒指導において 貫きたい 10 の基本姿勢

子どもや保護者からの
信頼の土台を築くために！



基本姿勢

1

大人のモデルとして

子どもは、教師の身だしなみや言葉遣いはもちろんのこと、表情や様々な行動から、敏感にその人間性を感じとっています。子どもは、教師に毎日接していく中で、人間として同感し大人のモデルとして自分の中に取り入れていくこともあれば、逆に、批判の対象として見ていくこともあります。



基本姿勢

2

言行一致

子どもは、教師が「言っていること」と「行っていること」をよく見ています。例えば、「授業中は間違えてもいいんだよ」と言っていた教師が、誤答した子どもに冷たい態度をとれば、それは学級内に「間違った回答をしてはいけない」という暗黙の理解を生み出してしまうだけでなく、「この先生の言うことは信用できない」という不信感も招いてしまいます。



基本姿勢

3

指導の一貫性

日によって子どもへの指示が変わったり、相手によって許容する範囲が違ったりすれば、子どもはいずれ教師の指導を受け止めなくなります。学級開き直後は教師も張り切りですが、例えば4月に頑張って指導していた「朝の元気な挨拶」や「教室の美化」も月日が経つにつれ怠惰になったり緩くなったりすれば、子どもの眼には「一貫性のない指導」として映るかもしれません。



基本姿勢

4

同一歩調

学校は組織です。どんなに個人として信念を持って、一生懸命に取り組んでいても、そこに職員間の合意が形成されていなければ、生徒指導はうまく機能しません。子どもにとって、「A先生もB先生もやっぱり同じことを言うんだな」という受け止めは、安心感になります。教師集団の同一歩調は、指導の効果を上げる意味でも大切です。



基本姿勢

5

全員に確実に指導する

当番活動や係活動、授業の受け方はもちろん、机の中の整理整頓や給食時のマナーなど、学級の中で指導しなければならないことはたくさんあります。大切なことは、実際の場面で全員に分かるように示し、一人一人に身に付くように指導していくことです。

基本姿勢

6

「定着」を目指して指導する

指導にはその要点をおさえる場面と様々な機会を捉えて、定着するようにしていく場面があります。継続した指導とは、単に繰り返し同じ説明をするということではなく、全員ができるようになるために工夫し、支援し続けることです。

基本姿勢

7

意義や価値を教える

子どもにある行動を身に付けてほしいときには、そのことに対する価値観を子ども自身が内面化できるようにすることを目指します。小学校低学年では、具体的場面で例を示しながら、形から指導することも必要ですが、発達の段階に応じて、子どもがその意義や価値を理解し納得するプロセスが欠かせません。

基本姿勢

8

「自律」を目指して指導する

規範やルールを押し付けるだけの指導では、子どもの自律にはつながりません。教師は、子どもが自らの意志で行動し、自らを律していけるようになることを目指して指導します。規範やルールは子どもの行動を規定する枠組みではなく、その意義や必要性を自覚できるように示していくことが大切です。

基本姿勢

9

最後まで支援する

生徒指導と聞くと、教師が子どもを「指導」することだけをイメージしがちですが、「指導」には「援助」の要素が不可欠です。困っているとき、うまくいかないときなどに、最後まで一緒に考え、支えてくれる教師であるからこそ、子どもはその指導を受け入れるのです。

基本姿勢

10

人間的な触れ合いを大切にする

どんな指導方法や指導技術も、万能なものではありません。学級においては、何よりも、学級担任と子どもたちとの人間的な触れ合いが必要です。日々愛情をもって子どもと向き合い、いつでも「子どもの成長への願い」を語ることができる教師でありたいものです。

4 学級担任の生徒指導 HOW TO

「本編」の活用にあたって

「本編」の特徴

- 特徴 1** 学級経営に役立てることができるように、学級の様々な場面における指導の在り方を、生徒指導の観点から述べています。
- 特徴 2** 学級を不安定にしてしまう要因や失敗例などの「マイナスの視点」を盛り込み、生徒指導上のアドバイスを述べています。
- 特徴 3** 日々の指導に活用してもらうことをねらいとして、あえて、概論的な説明を最小限にとどめ、場面ごとの指導の具体や指導に当たっての考え方を示しています。

期待を背負う若手教員のために

大量退職の時代を迎え、平成 26 年度からの 10 年間で 5 割近い教員が退職を迎えます。世代交替の進展に伴う若手教員の育成、とりわけ学級担任としての力量向上はこれまで以上に求められる状況にあります。若い教師への期待は今後ますます高まります。

求められる“安定した学級経営を行う力量”

生徒指導は、全教職員によって進められるべきものですが、実際の指導に当たっては、学級担任の果たす役割は大きいものがあります。一方で、近年、生徒指導上の問題は複雑化、多様化しており、学級担任の生徒指導は難しさを増しています。長年経験を積んだ教師であっても、一年間学級担任をやり抜くということは決して容易なことではありません。そのようなことから、すべての学級担任が、一年間学級を安定させ続けることが、より一層強く求められています。

日々の指導に即活用できるものとして

適切な指導方法には、その根拠となる理論的な裏付けがあり、それを学ぶことは必要です。しかし、学校、学級の状況はまちまちですから、若い教師にとっては、まず実践に即した指導の在り方を学んでいくことが、力量向上につながりやすいと言えるでしょう。よって、本編はできるだけ具体的な指導や対応の例を示し、日々の実践に活用できるものとして作成しています。

「本編」の見方

子どもの立場に立ち、学級を不安定にする要素を述べています。

学級を安定させ、子どもを成長させる指導の視点について述べています。

指導の具体やその意義、指導に当たっての考え方のポイントを示しています。

この場面で指導する主なこと

1 学級開き

学級開きは、一年間の学級生活を有意義なものにする上での大切なスタートとなる場面です。

①ここに注意 子どもにとっては・・・

- ◆子どもは、期待に胸を膨らませ、新年度のスタートを楽しみにしています。反面、新しい学級担任、新しいクラスメートとの一年間の始まりに緊張と不安で心は揺れ動いています。
- ◆クラス替えで仲の良い友達と離れてしまった子どもは期待よりも不安を強く感じています。
- ◆4月当初は、学級内のルールやリレーションが確立していないため、子どもが受けているストレスは、通常より高い状態にあると考えられます。

Qここに注目 一安定した学級生活のために

- ◆「子どもが安心できる学級」を目指す上で、スタートは重要です。
- ◆多くの子どもは、新しい出会いに胸をときめかせ、「いろいろなことに挑戦しよう」、「頑張ろう」という新鮮な気持ちを持っています。
- ◆新鮮で前向きな気持ちだからこそ、この時期、子どもは教師の話をよく聞き、指導を素直に受け止めます。この時期を逃さずに当番活動などの学級のシステムを固め、学級生活の土台をつくれます。

初めの一か月で行うこと

1 学級目標をつくり、学級への願いを共有する	5 低活動を開始させ、子どもの意欲的な発言を取り入れる
2 当番活動を軌道に乗せる。	6 良いことを評価しながら、学級の規律を整える。
3 朝の会・帰りの会で学級生活のリズムをつくる。	7 学級行事を企画し、楽しい取組をみんなで実行する。
4 班の活動を工夫し、班を学級生活の拠点とする。	8 「楽しく分かる授業」を意識して展開する。

①危険！学級のシステムづくりの先延ばし

「システムづくりはいつでもできる」と安易に考え、先延ばしにしてしまうことは危険です。システムづくりは、一か月後にやろうとしても、既に不十分なやり方が固定化してしまっていて、上手くいかないものです。子どもが素直に話を聞き、教師の提案をスムーズに吸収するのは、学級開きから短期間とも言われています。システムが固まらないままに時間が過ぎると、小さなトラブルが起き始めます。この時期を逃してしまふとかなりの時間と労力が必要になると心得ましょう。

ここがポイント

HOW TO 行うべきこと

- 学級担任の思いを伝える。
- 準備を整えて臨む。
- 学級のシステムを短期間でつくる。

① 毅然と、そして温かく、学級担任の思いを伝える。

- 一年間を大きく左右する場面です。どんな集団、どんな一人一人になってほしいのかを毅然と、そして温かく語ります。また発達段階を考慮し、子どもに伝わるように話すことが大切です。
- 子どもが求めているのは、「安心と安全」です。他人を傷つける行為、いじめ等、絶対に許されない事柄も伝え、安心感を与えましょう。
- 有言実行。この場で言ったことは、一年間、守り通します。

② 出会いの準備を入念に行う。

- 出会いの演出、自己紹介、所信表明の内容、オリエンテーション等について、詳しく計画を立てましょう。
- 一般的には、前日までに以下の準備をしておきます。
 - ◆教室の整備（清掃、机・椅子の整頓、黒板へのメッセージ）
 - ◆名簿（提出物チェックやメモ記入用の名簿）、初日の出席表
 - ◆下駄箱、教室ロッカーの鍵の渡し方とトラブルの対応
 - ◆学級連絡、配布物や提出物の確認、初日の流れの確認等
- 学年で統一すべきものもあります。情報交換を行い、自分なりの工夫も加えながら適切に準備を進めていきましょう。

③ 短期間で学級のシステムをつくる。

- 学級開きから短期間で学級生活の基本的な約束やシステムをつくりたい。「いつ、誰が、何を、どのようにするのか」を全員に伝え、一つ一つ定着させていきます。
- ＜学級のシステムとは＞
 - ◆日直の仕事・給食の配膳の仕方や分組・清掃の仕方や分組
 - ◆学習用具や授業に関すること・連絡網の活用・席替えの方法等
- システムは1年間変更しないことを前提に、事前にかかりと練り込んだものを定着させていきましょう。前年度のやり方を変更する場合は、その理由を全員で確認することが必要です。

① 前日は○○だったよ

年度初めに「前は○○だったよ」「△△先生はこうやっていたのよ」と言う子どもがいます。前年度までのやり方を、学級担任が勝手に変更すると子どもは混乱します。学級のシステムに関わることは、全員で確認し、理解することが重要です。「自分は聞いていない」という何人かの思いから、教師との信頼関係が壊れていくことがあります。

よくある失敗とそれを回避するためのアドバイス、または、起こり得る問題とその対応についてのアドバイス

この場面の指導に当たって参考となる資料

左記の指導に当たって、「留意すること」や「指導の効果を上げるために欠かせないこと」

学級開き

学級開きは、一年間の学級生活を有意義なものにする上での大切なスタートとなる場面です。



①ここに注意 子どもにとっては・・・

- ◆子どもは、期待に胸を膨らませ、新年度のスタートを楽しみにしています。反面、新しい学級担任、新しいクラスメートとの一年間の始まりに緊張と不安で心は揺れ動いています。
- ◆クラス替えて仲の良い友達と離れてしまった子どもは期待よりも不安を強く感じています。
- ◆4月当初は、学級内のルールやリレーションが確立していないため、子どもが受けているストレスは、通常より高い状態にあると考えられます。



②ここに注目 ー安定した学級生活のためにー

- ◆「子どもが安心できる学級」を目指す上で、スタートは重要です。
- ◆多くの子どもは、新しい出会いに胸をときめかせ、「いろいろなことに挑戦しよう」、「頑張ろう」という新鮮な気持ちを持っています。
- ◆新鮮で前向きな気持ちだからこそ、この時期、子どもは教師の話をよく聞き、指導を素直に受け止めます。この時期を逃さずに当番活動などの学級のシステムを固め、学級生活の土台をつくります。



初めの一か月で行うこと

- | | |
|--------------------------|------------------------------|
| 1 学級目標をつくり、学級への願いを共有する | 5 係活動をスタートさせ、子どもの豊かな発想を取り入れる |
| 2 当番活動を軌道に乗せる。 | 6 良いことを評価しながら、学級の規律を整える。 |
| 3 朝の会・帰りの会で学級生活のリズムをつくる。 | 7 学級行事を企画し、楽しい取組をみんなで実行する。 |
| 4 班の活動を工夫し、班を学級生活の拠点とする。 | 8 「楽しく分かる授業」を意識して展開する。 |



①危険！学級のシステムづくりの先延ばし

「システムづくりはいつでもできる!」と安易に考え、先延ばしにしてしまうことは危険です。システムづくりは、一か月後にやろうとしても、既に不十分なやり方が固定化してしまっていて、上手いかないものです。子どもが素直に話を聞き、教師の提案をスムーズに吸収するのは、学級開きから短期間とも言われています。システムが固まらないままに時間だけが過ぎると、小さなトラブルが起き始めます。この時期を逃してしまふとかなりの時間と労力が必要になると心得ましょう。



ここがポイント

HOW TO



- 学級担任の思いを伝える。
- 準備を整えて臨む。
- 学級のシステムを短期間でつくる。

POINT 1 毅然と、そして温かく、学級担任の思いを伝える。

- 一年間を大きく左右する場面です。どんな集団、どんな一人一人になってほしいのかを毅然と、そして温かく語ります。また発達の段階を考慮し、子どもに伝わるように話すことが大切です。
- 子どもが求めているのは、「安心と安全」です。他人を傷つける行為、いじめ等、絶対に許されない事柄も伝え、安心感を与えましょう。
- 有言実行。この場で言ったことは、一年間、守り通します。

①熱くなりすぎると・・・

出会いの場面です。伝えたいことは数多くありますが、話が長くなってしまうと、効果が薄れるだけでなく「話が長い先生」という印象を与えてしまいます。要点をまとめ、子どもに安心と希望を与えるように語ることが大切です。

POINT 2 出会いの準備を入念に行う。

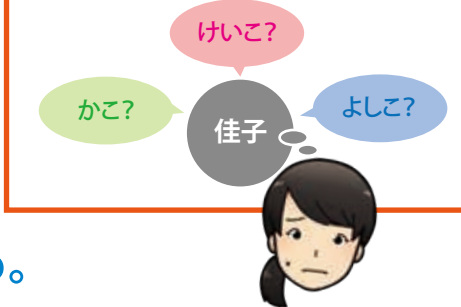
- 出会いの演出、自己紹介、所信表明の内容、オリエンテーション等について、詳しく計画を立てましょう。
- 一般的には、前日までに以下の準備をしておきます。

- ◆教室の整備(清掃、机・椅子の整頓、黒板へのメッセージ)
- ◆名簿(提出物チェックやメモ記入用の名簿)、初日の座席表
- ◆下駄箱、教室ロッカーの割り当てとラベルの貼付
- ◆学級通信、配布物や提出物の確認、初日の流れの確認等

- 学年で統一すべきものもあります。情報交換を行い、自分なりの工夫も加えながら適切に準備を進めていきましょう。

①名前、読めますか？

初日、名前を正しく読めなかったために、出会った子どもをがっかりさせてしまうことがあります。同じ漢字でも様々な読み方がある名前や、読み方が難しい名前もあります。名前を正確に読めるようにしておくことは、学級担任として、一人一人の子どもの出会いを大切にしていることを伝える意味でも大切です。



POINT 3 短期間で学級のシステムをつくる。

- 学級開きから短期間で学級生活の基本的な約束やシステムをつくります。「いつ、誰が、何を、どのようにするのか」を全員に伝え、一つ一つ定着させていきます。

<学級のシステムとは>

- ◆日直の仕事◆給食の配膳の仕方や分担◆清掃の仕方や分担
- ◆学習用具や授業に関すること◆連絡帳の活用◆席替えの方法等

- システムは1年間変更しないことを前提に、事前にしっかりと練り込んだものを定着させていきましょう。前年度のやり方を変更する場合は、その理由を全員で確認することが必要です。

①前は〇〇だったよ

年度初めに「前は〇〇だったよ」、「△△先生はこうやっていたのに」と言う子どもがいます。前年度までのやり方を、学級担任が勝手に変更すると子どもは混乱します。学級のシステムに関わることは、全員で確認し、理解することが重要です。「自分は聞いていない!」という何人かの思いから、教師との信頼関係が崩れていくことがあります。

学級目標づくり

学級目標づくりは、合意に至るまでのプロセスがとても重要です。



①ここに注意

子どもにとっては・・・

- ◆学級開き直後の学級では、子ども一人一人の帰属意識や連帯感が高まっていない状態です。
- ◆目標や統一されたルールがない学級は、子どもの不安を助長します。
- ◆教師からの一方的な提示によって設定された学級目標には、子どもの意欲を喚起したり、帰属意識を高めたりする効果は期待できません。



②ここに注目

—安定した学級生活のために—

- ◆「こんな学級にしたい」という願いを共有することで、子どもの不安は減っていきます。
- ◆学級目標づくりは、目標を設定するまでの話合いや感情の交流がとても大切です。
- ◆みんなで一つの目標に向かって協力し、自主的・実践的な活動をするに学級目標の意義があります。



①学級目標は“きまり”ではありません

「ケンカをしない」、「人の嫌がることをしない」などの禁止事項を目標に挙げる子どももいます。学級目標は互いの行動を規制する“きまり”ではなく、目指す学級の姿であることを伝えましょう。学級目標を掲げた後、その実現に向けて「やらなければならないことは?」、「してはいけないことは?」と、必要な“きまり”を全員で確認しながら設定していくとよいでしょう。



学級目標づくりの例

- 1 学級開きで学級担任の「目指す学級像」や「一人一人への願い」を伝える。
- 2 子ども一人一人の「学級への願い」を全員で確認する。
- 3 類似意見を集約したり、入れたい言葉を抽出したりしながらまとまりと方向性をつくっていく。
- 4 学級の個性や全員の思いを上手く表現したフレーズに仕上げる。
- 5 学級目標に込められた意味を全員で確認する。

<方法>

- ◆全員分を学級通信に載せる。
- ◆紙に書いたものを黒板に貼って一覧したり教室に掲示したりする。
- ◆小学校低学年の場合は、教師が口頭でやりとりしながら、子どもの思いや考えを引き出した上で、全体で確認する。



ここがポイント

HOW TO



- 学級担任の願いを伝える。
- 子どもたちの願いを吸い上げる。
- 全員の納得、合意の上で決定する。

POINT 1

「こんな学級をみんなで目指す!」という思いを持たせる。

- 学級目標は「私たちの学級はこうありたい」という集団の理想像です。そこには子どもの思いが欠かせません。そこで、学級目標づくりに当たっては、まず、子ども同士が互いの「学級への願い」を知ることから始めます。そしてそれらが自分と同じであることを確認し合ったり、多少異なる部分があっても受け止め、擦り合わせたりしながら「みんなで目指す」という思いまで高めていくことが大切です。

①子どもの思いが込められている?

とにかく教室の前面に何か「格好のついた言葉」を掲げればよいという風潮が見られます。例えば各学級一律に、学年目標を貼り付けるだけであったり、学級担任が一人で決めた目標を掲げてしまったりすることは、子どもの思いとは、ほど遠いものになってしまう。

POINT 2

目標を決めるまでのプロセスを大切にする。

- 学級目標づくりににおいて大切なことは、子ども一人一人が「自分がつくった」、「自分も参加した」という思いを強く持つことです。
- 目標を決定するまでの子ども同士の話合いや感情の交流から、既に学級担任が目指す集団づくりが始まっています。
- 話合いに当たっては、「どのようにして全員の願いを込めるか」や「どのようにして日々の生活の中で励みとなり、みんなで目指す価値のあるものにするのか」などの検討の視点を、発達の段階に応じて示してあげることが大切です。

①ここで多数決?!

時間を十分に確保せず、話合いが深まらないまま、安易に多数決で決めてしまうことは避けたいものです。子ども一人一人の願いを大切にしたことにならないだけでなく、「そこに自分の意見が入っていない」という思いを持たせてしまうこともあります。目標づくりにおいては、子ども同士が合意形成を図っていく過程がとても重要です。

POINT 3

立てた目標を生かす。

- 学級目標を生かすためには、「みんなで目指す」という気持ちを持続させ、絶えず学級の取組を見直ししながら、全員で評価を積み重ねていくことが大切です。具体的な場面で、目標の実現に向けて「自分がしなければならないこと」や「自分にできること」をその都度考え、実行できるようになることを目指します。
- 学級全員で取り組む行事は、目標を生かす絶好のチャンスです。立てた目標に向かって心一つにして取り組む意義を実感させましょう。

①絵に描いた餅

残念なことに、学級目標が「忘れ去られたお題目」として存在してしまうことがあります。学級の中に一つの目標に向かっていこうとする学級担任と子どもの「姿勢」や「気持ち」が感じ取れない限り、それはただの「色あせた掲示物」になってしまいます。

学級組織づくり 当番活動・係活動

学級組織は、学級目標の達成に向けた手段であり、重要な機能です。一人一人が役割を担う当番活動や係活動は、帰属意識や自己有用感を育みます。



①ここに注意

子どもにとっては・・・

- ◆当番活動や係活動を単なる「仕事」として捉えてしまうと、活動への意欲を感じにくくなります。
- ◆役割や所属が決まっても、子どもによっては上手に活動できなかったり、仕事の量に差が生まれたりすることがあります。
- ◆学級の組織が機能しなくなると、子ども同士の人間関係や学級生活が不安定になります。



②ここに注目

ー安定した学級生活のためにー

- ◆子どもは、互いに役割を分担し遂行することを通して、より良い人間関係を築くとともに、社会生活の基本を学んでいきます。
- ◆本来、子どもは「学級の仲間や先生に認められたい」という欲求を持っています。活動を通して、「自分は学級に貢献している」、「仲間から必要とされている」という喜びを体得させながら、学級への帰属意識や自己有用感を育んでいきます。



ここがポイント

HOW TO



- 当番活動、係活動のねらいや必要性を伝える。
- 組織をつくり、一人一人に役割を持たせる。
- 全員が責任を持って取り組めるように指導する。
- 自主的に活動できるシステムを構築する。

POINT 1

学級組織＝学級目標達成のための手段の一つ！

- 「学級組織は学級目標達成のための手段の一つ」と心得ましょう。目標達成に向けて、子ども一人一人が役割を担い、協力しながら自主的に活動することが、楽しく豊かな学級生活の実現につながります。
- 当番活動や係活動は学校生活を送る上で必要な子どもの役割であると同時に、教師にとっては、より良い集団を育てるとともに、子どもの社会的資質を高める上で重要な手段です。

①できて当たり前？

当番や係の仕事は、全員に手順を示し、丁寧に指導します。中には、上手くできなかったり、さぼったりする子どももいます。しかし、初めから全員がきちんとできるのであれば、教師の指導は必要ありません。全員ができるようになるまで、根気強く指導する過程で子どもは育ちます。

POINT 2

一人一人に役割を持たせる。

- 学級組織づくりは、一人一人を学級生活の向上・発展に貢献できるように導くことを大きなねらいとしています。したがって、当番や係を分担する際には、一人一人に役割を持たせることが必要です。
- 一人一人の役割は「学級のみんなの役に立った」、「学級の友達と仕事をして楽しかった」などの充実感や学級の一員としての自覚を持つことができるようにすることを目指すものです。活動を通して、「仲間にも認められ、学級に貢献している」という喜びを味わわせることが大切です。

①役割は何のため？

活動を疎かにしている子どもに、「仕事を増やす」などの、いわゆる「罰」を与えるような指導は適切とは言えません。罰を受けることが積み重なると、子どもは、やがて活動に意欲を持てなくなったり、周りから「ダメな子」というレッテルを貼られたりすることもあります。出番を上手に与え、子ども一人一人を輝かせる学級担任でありたいものです。

POINT 3

自主的に活動できるシステムと環境をつくる。

- 役割分担をしたら、活動計画を立てさせ、「いつ、誰が、何をどのようにするか」を明確にし、全員が分かるようにします。また、子どもがいつでも自主的に活動できるように用具等を使いやすく準備しておくなどの環境づくりも大切です。
- 朝・帰りの会等で活動状況を報告させたり、「係活動コーナー」等の掲示物を作成させたりして定期的に活動状況を発表する場を設定しましょう。学級組織が機能し活性化するとともに、互いが日頃の成果を認め合う良い機会になります。

①何もしていない係はありますか？

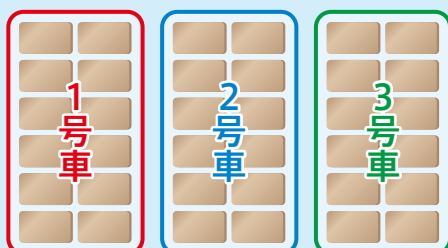
学級に役立つようにと、係をつくっても、活動が停滞する場合もあります。その場合には、教師の援助が必要になってきます。係を大切にすることは、その子どもの出番を大切にすることです。学級目標達成のために係として何ができるかを一緒に考え、実行できるように最後まで援助しましょう。



班編成と当番活動

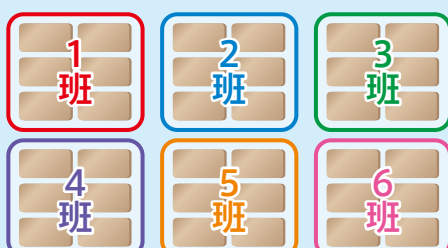
当番活動は、給食や清掃、日直の仕事など、毎日の学級生活を維持するためにはなくてはならない活動であるため、「班」を生かして、全員が順番や役割を決めて、公平に行います。活動を通して、責任や協力、働くことの意義を体得するとともに「学級に貢献している」という喜びを味わうことができるように指導します。

■小学校に多い班編成



当番を行う単位となる。

■中学校に多い班編成



中学校では、班は給食・清掃以外にも教科連絡や掲示などの係を受け持つなど、学校生活の充実と向上に向け、より自主性を重視した組織を編成します。

当番活動のポイント

- ①当番が機能するような班編成を行う。
- ②全員が活動できるように、分かりやすく活動の手順を示す。
- ③班や号車内の仕事の分担を明確にしておく。しかし、学年が上がるにつれ、状況に応じて進んで手伝えるなどの臨機応変さや自主性も大事になるため、発達の段階に応じて工夫する。
- ④中学校では、原則、班に班長をおく。当番活動を通して、リーダーを育てていくとともに、フォロワー（協力）の精神を培っていく。小学校においてはリーダーを固定化することは少ないが、発達の段階に応じて班長を経験させることで、フォロワーの大切さを学ばせていくことができる。
- ⑤学級担任は、子どもと一緒に活動し、褒めや励ましなどの適切な評価を行う。

※係活動は、学級生活を豊かで充実したものにするために、子どもの創意工夫を生かし自主性を促す活動です。班にとらわれず、「どんな係があると楽しいのか」、「どんな係があると学級が向上するのか」などについて、子どもが話し合って決めます。（例 教科連絡係、レクリエーション係、生き物係など）

席替えは、学級担任がより良い学級をつくるために、様々なことに配慮して実施します。



①ここに注意

子どもにとっては・・・

- ◆席替えは、子どもにとって学校生活を営む上での大きな関心事の一つです。
- ◆座席は班編成や毎日の当番活動などの学級組織にも関連するため、担任の教育的な意図が反映されない決め方をすると、人間関係や学級のシステムを不安定にする恐れがあります。



②ここに注目

ー安定した学級生活のためにー

- ◆学級担任は、学級全員が安心して毎日の学習や諸活動に取り組むことができるような座席決めを行わなければなりません。
- ◆子どもに方法を委ねることを否定するものではありませんが、それができるのは学級が十分に成熟している場合に限られます。
- ◆通常、席替えは、子どもの思いも生かしつつ、学級担任が意図する学級の雰囲気づくりや学級集団の向上を目指して実施します。



③班長選出じゃんけん!

班長を押し付け合ったり、「じゃんけん」で決めたりすることは避けたいものです。そのような決め方で班をスタートすると、協力的な活動は期待できません。班長を決める際には、事前に「班長にふさわしい人物とその条件」についてのアンケートなどで子どもの考えを明らかにし、学級全員で承認する形をとるとよいでしょう。

リーダー育成やフォロワーシップを高める観点からも大切なことです。



リスクの高い席替えの方法



好きな者同士・自由席

席替えて、絶対にしてはいけない方法

- ◆固定化した人間関係や歪んだ力関係が生まれることが心配される。



くじ引き

学級の全員が自律的に互いを支え合える状態になってはじめて行える方法

- ◆リレーションの取りにくい班編成や学力のバランスが取れていない座席配置になる可能性がある。
- ◆方法は公平でも結果は公平にはならない。



リーダーによる話合い

リーダーの資質が大前提となる方法

- ◆全員が希望通りになることはあり得ないため、数名のリーダーがその責任を背負い切れるかどうか心配される。



お見合い方式

(女子が教室で決める間、男子は廊下で待つ。その後入れ替わり、最後にマッチング)

「くじ引き」とほぼ同様のリスクがある方法

- ◆しかし、くじ引き以上に誰(異性)と隣になるかがより強く意識されてしまう。



ここがポイント

HOW TO



行うべきこと

- 年度初めに席替えの方針を説明する。
- 座席と班の決定は、人間関係、学級組織・学力など様々なバランスに配慮して行う。
- 学年で足並みをそろえて行う。

POINT 1

1年間を貫く席替えのルールを整える。

- 席替えは、学級担任が責任を持って行う大切な仕事です。学級担任の考えが反映されない決め方をすると深刻なトラブルに発展することがあります。
- 年度初めに席替えについての学級担任の考えを、子どもにきちんと話しておく必要があります。様々なことに配慮して座席を決めようとしていることを子どもに伝え、それが実感できるような席替えを行います。
- 子どもに示したルールは原則として一年間変えない方針で進めることで学級に落ち着きが出るでしょう。

①年度初めの約束を貫く

年度途中に、子どもからくじ引きでの席替えを提案されることがあります。「たまにはいいかな」と安易に妥協すると、「トラブルの起こりやすい座席配置」になることもあります。年度初めの約束を変えるときは、相当な理由が必要です。安易な約束の変更は子どもの信頼を低下させることにもなります。

POINT 2

席替えは子どもの様々な状況を考慮する。

- 席替えにおいては、「休みがちな子どもがいる場合の班の人数」や「班の構成メンバーの学力のバランス」、「人間関係のバランス」の調整など、学級担任としての最善の配慮が求められます。ほかにも子どもの様々な状況を考慮しながら行います。
- また、小学校高学年や中学校においては班にリーダーがいることも大事な条件です。さらに中学校では各教科の授業における活動も考慮し、教科担任との連携も図って行います。

例)席替えにおいて配慮が必要な子ども

- ◆身長の高い子ども
- ◆視力や聴力に難のある子ども
- ◆関係の良い友達が少ない子ども
- ◆授業中に個別の指導が必要な子ども
- ◆周りの子どもにちょっかいを出す子ども

POINT 3

席替えは、学年全体の動きも考慮する。

- 席替えは学級・学年づくりに大きく影響することから、実施時期は学年で一致させるとよいでしょう。
- 座席の基本的なルールや意味については、年度初めに学年で十分に話し合い、同一歩調で進めます。例えば班の数、一つの班の人数、当番活動との連動の仕方、実験や実習などの活動単位については、学年でそろえておきましょう。そうすることで、学級間の連携した指導も上手いきます。

①学級独自で大丈夫?

頻繁に席替えをする学級と学期に1回程度しか席替えをしない学級が同じ学年にあったらどうでしょう。ややもするとそれは子どものそれぞれの学級担任への評価となり、信頼関係を揺るがしてしまうことになります。席替えは教育活動の成果を上げるための重要な環境づくりです。教師集団が足並みをそろえ、チームワークを意識して進めることは子どもの安心感と教師集団への信頼につながります。

給食指導

公平で安定したシステムを構築し、
楽しい時間となるように配慮します。



①ここに注意

子どもにとっては・・・

- ◆給食は子どもが楽しみにしている時間の一つです。しかし、差別や力関係の問題が起こりやすい時間でもあり、給食時間に不安を感じている子どももいないわけではありません。
- ◆給食当番の仕事や配膳・下膳などが、円滑に進まないことは、ストレスの要因やトラブルの原因になることも少なくありません。
- ◆食事のマナーや偏食、食べる量や速さなど、家庭でのしつけや生活習慣が現れる場面であり、学級担任のきめ細やかな配慮と支援が必要となります。



②ここに注目

ー安定した学級生活のためにー

- ◆給食は「食べる」という生活の基本となる場面であるため、準備から片付けまで、毎日安心して活動ができるように、公平で安定したシステムづくりが必要です。
- ◆協力して準備や片付けを行い、楽しく会食できるように指導することで、子ども同士や教師と子どもとの心の交流が図られ、学級生活をより豊かにします。



ここがポイント

HOW TO



- 役割分担やルールを示し、定着させる。
- 準備、配膳、食事、下膳、片付けの仕方の指導を徹底する。
- 楽しく会食し、心の交流を図る。

POINT 1

給食の当番システムを構築し機能させる。

- 給食当番を1週間交代の輪番制にして、当番表を用い、「誰が、何を、どのようにするのか、何番の給食着を着るのか」を一目瞭然の状態にします。
- 仕事内容には軽重があるので、全員が納得して取り組むことができるように、公平な役割分担にします。教師は、分担や輪番が機能していることを常に確認しながら指導しましょう。

①最初が肝心!

年度初めの4月からしっかりとルールを決め、定着するまで徹底して指導しましょう。曖昧なルールでスタートすると、人間関係に問題が生じ、学級全体の乱れにつながる可能性があります。乱れが生じてから新しいルールをつくっても効果は期待できません。

POINT 2

一人分の量とおかわりの調整は、教師が行う。

- 個数が決まっているおかずは、子どもに配膳を任せることができますが、決まっていないものは分量にばらつきが出ます。初めに教師が分量を示し、「おたま すり切り1杯」など、具体的で子どもがイメージしやすい量にしてあげましょう。
- 配膳直後に個に応じて量の調整をします。おかわりは、不公平にならないよう、必ず教師が関わり、コントロールしましょう。また、子ども同士で直接譲り受けをすることのないように指導します。譲る子どもや譲られる子どもが固定化してしまい、良好な人間関係が築きにくくなります。



①○○君はいつも大盛り?!

給食の時間を子どもたちに自由に任せると、強い子が分量やおかわりを仕切るという力関係ができてしまいます。給食指導の中には、学級崩壊の要因になるものがたくさん潜んでいます。全職員で共通理解を図り、同一歩調で指導にあたるようにしましょう。強い子が得をし、弱い子が損をするような構図を絶対につくってはいけません。

POINT 3

下膳指導を徹底する。

- 食器などの自分が使ったものは、必ず自分自身で片付けさせます。下膳の仕方は、学級の子どもの人数や発達段階に合った方法を考えます。下膳指導を通して、一人一人に安全で、きれいな片付け方を身に付けさせましょう。
- 片付けは動線を考えて準備をしておくことが大切です。動線の順に食器かごやゴミ箱を配置するとともに、食器に食べ物が残ったまま重ねたり、食器を投げるなど乱暴な片付けをしたりすることがないよう指導します。当番には、教師と一緒に片付けの様子を最後まで見届けさせます。

①牛乳ジャンケン?

片付けの際、牛乳パックなどを班でまとめることがあります。その役割をジャンケンで決めることは、一見平等に決めているように見受けられますが、実は、同じ子どもや弱い子どもがいつもやられていることがあるので、注意深い観察が必要です。



給食当番表(例)

食器 1 (皿)	1
食器 2 (お碗)	2
おぼん	3
おぼん	4
牛乳	5
丸かん	6
おかずかん 1	7
おかずかん 2	8

1番、2番の人は食器、3番、4番の人はおぼんというように、班内での仕事の分担を明確に決めておきます。例えば人を示す「1」や「2」の数字はマグネットで作成し、定期的に移動させます。また、マグネットシートを活用し、児童生徒の氏名を記入するのもよいでしょう。



①「えっ 給食がない!」

「いざ食べようと思ったときに、給食当番の机上に給食がない!」これは当番の子どもにとっては大変ショックなことです。給食当番が尊重されるように、当番の分を配膳する係を決めて最初に配膳するなど、きめ細やかなルールをつくり、それを徹底しなければなりません。また、給食当番の労をねぎらうような声がけもしましょう。



①「こぼした!」

運搬中や下膳中に給食をこぼすことがよくあります。そのようなときに、子どもたちが気持ちよく協力して回復にあたることのできるような学級づくりをしておきましょう。配膳前に大量にこぼしてしまった時は、一人分を少量にしたり、他の学級から分けてもらったりすることもあります。助け合う気持ちや感謝の気持ちを育てながら指導しましょう。

清掃指導

公平で取り組みやすいシステムを構築するとともに、協力や責任の意義を体得できるように指導します。



①ここに注意

子どもにとっては・・・

- ◆清掃時間は、子ども一人一人に教師の目が届きにくく、トラブルが発生しやすい時間です。
- ◆学年が上がるにつれ、清掃活動への意欲が低下することも少なくありません。
- ◆一人一人の取組に差が生まれると、子ども同士の望ましい人間関係が築けなくなります。



②ここに注目

ー安定した学級生活のためにー

- ◆一部の子どもが、嫌な思いや不公平感を抱くことがないように、公平なシステムを構築することが必要です。
- ◆すべての子どもが取り組みやすい方法を示すとともに、みんなで清掃した後の清々しさや爽快感を味わうことができるように指導します。
- ◆清掃活動は学級集団への帰属意識を高め、協力や責任の持つ意義を体得することができる活動です。



③“早く終わった子ども”はどうするの？

分担には多少の軽重があるので、早く終わってしまい遊び始める子どもが出てきます。そのような状況を回避するためには、早く終わった子どもをどうするかを決めておくことが大切です。例えば、終わってない仕事(教室の机運びなど)を進んで手伝うよう働きかけることなどは、活動の効率を上げるとともに、互いに協力し合う姿勢を育むことにもつながります。



清掃をしたがらない子どもはいませんか？

清掃活動は、学級の一員であるという自覚を持たせるためにも大切な当番活動です。しかし、学年が上がるにつれて、清掃をしたがらない子どもがいることも事実です。教師は、その原因と対応を考え、適切に指導しなければなりません。

どんな原因が考えられるか

- ◆整理整頓が苦手である
- ◆面倒なことをやりたがらない
- ◆清掃の仕方や手順がよく分からない
- ◆自分の役割がよく分からない
- ◆友達と良好な人間関係がつかれない
- ◆学級への帰属意識が薄い
- ◆清掃活動の意義が分からない
- ◆学級担任とのリレーションに課題がある

対応を自己チェックしましょう!!

- ☐ ふだんから整理整頓の指導と支援をしているか
- ☐ 清掃の手順ややり方を具体的に示しているか
- ☐ 清掃ができない子どもに個別に支援しているか
- ☐ 個々の役割を明確に示しているか
- ☐ 協力し合えるようなやり方を示しているか
例)「Aさんが掃いた所からBさんが拭く」など
- ☐ 活動を評価し、自信を持たせているか
- ☐ ふだんから「このクラスにいてよかった」と実感できるような学級生活への満足感を与えているか
- ☐ 清掃の意義を語り、子どもと一緒に活動しているか



ここがポイント

HOW TO



- 役割分担やルールを示し、定着させる。
- 清掃の仕方の指導を徹底する。
- 子ども同士の協力体制を構築する。



④ゴミ捨てジャンケン

ゴミ捨て当番を毎回ジャンケンで決めていたり、仕事を押し付け合ったりする姿を見かけたら、それは「公平性」が失われ始めている証拠です。年度初めに決めたルールや清掃の意義を全員で確認し、一年間同じ方針で指導することが肝心です。

POINT 1

公平なシステムを整えるとともに、清掃の仕方を丁寧に指導する。

- ほうきで掃く、雑巾で水拭きをする、ごみを捨てるなど、清掃活動には様々な仕事があり、仕事の量や質も異なるため、公平な役割分担やルールが必要です。役割のローテーションにより、全員が納得して取り組めるようなシステムを構築し、確実に指導していきましょう。
- 全員がどの仕事でもできるように、掃き方、拭き方などの清掃の仕方と手順を示し、丁寧に指導することが必要です。

POINT 2

協力して取り組めるように指導する。

- 清掃は毎日短時間で行う活動であるため、協力して効率良く取り組めるような工夫も必要です。
- 例えば「ほうきで掃いたところから水拭きをしていくこと」や「教卓やオルガンなどの重いものはいつもペアで運ぶこと」など、協力して効率性を高めるやり方を示すことも効果的です。
- 清掃の開始時と終了時には、メンバーがそろって分担や今日の取組の確認をすることが必要です。終了時には、教師と一緒に確認し、協力体制も含めた取組を評価します。

⑤今日の目標は〇分!

「効率よく!」と指示しても、おしゃべりが多くなってしまったり、ふざけ合ったりして、非効率的な行動をする子どもが必ずいるものと心得ましょう。目標を持たせ、協力して短時間で清掃することの気持ちよさや楽しさを体得させていくことが大切です。

POINT 3

褒めること、認め合わせることで、子どもの心を育てる。

- できないことを指摘したり注意したりするだけでは、子どもは成長しません。「進んでたくさんの机を運ぶ子ども」、「丁寧な雑巾がけをしている子ども」、「黒板の拭き方が上手な子ども」などを見逃さず、タイムリーに褒めることが大切です。
- 例えば、模範となる子どもの取組を全体に紹介し、互いの良さに気付かせたり、認め合わせたりします。また、そっと声をかけて褒めることも子どもにとってはうれしいものです。

⑥褒める以前に

教師がいつも清掃活動に立ち会って指導し、子どもの取組を正しく評価できていることが前提です。子どもを見る確かな目を持った先生からの褒めや励みだからこそ、効果を発揮するのです。

朝の会・帰りの会

朝の会、帰りの会は、学級生活を活性化し、学級の価値観を育みます。



①ここに注意

子どもにとっては・・・

- ◆朝の会は、子どもの心の状態や体調の良し悪しが表情や態度に表れやすい時間です。
- ◆帰りの会は、雑然としたり、落ち着かない雰囲気になったりしやすい時間です。
- ◆会の内容が形式的になると、学級組織や諸活動の活性化には繋がりません。



②ここに注目

—安定した学級生活のために—

- ◆この短時間を使って、挨拶の仕方や話の聴き方、発表の仕方など、生活や学習の基礎・基本の指導を徹底していきます。
- ◆また、学級担任が、自らのものの見方や考え方などを毎日伝えることができる時間でもあり、信頼関係の構築に欠かせない時間であると心得ましょう。
- ◆子ども同士や学級担任と子どもの本音の感情交流を大切に、学級の価値観を育むとともに、連帯感を高めることを目指して行うことが大切です。



ここがポイント

HOW TO



- 朝の会は一日の目標を示し、やる気を引き出す。
- 帰りの会是一日のまとめを行い、成果を確認する。
- 挨拶の仕方や話の聞き方等の基本的な姿勢を身に付ける。
- 子どもが自主的に運営できるようにする。

POINT 1

学校生活の基本を身に付ける場とする。

- 短い時間ですが、学校生活を送る上で身に付けてほしい基本的なことがたくさん詰まっている時間です。

◆挨拶の仕方 ◆礼の仕方 ◆返事の仕方 ◆メモのとり方
◆姿勢のとり方 ◆話の聴き方 ◆発表の仕方 等

- 目指す姿や指導の方法は、学年で確認し、統一して行うとよいでしょう。毎日、根気強く丁寧に指導していくことで学級の規律をしっかりとつくることができます。

①できていないのに

私語があろうと、横や後ろを向いていようと、手遊びをしていようと、教師がそれを気にも留めず放っておくと、子どもはいい加減な状態のまま、会を進めてしまいます。最初のうちは一つ一つ確認し、できるようになるまでやり直しをさせることが必要です。朝の会、帰りの会の意義を教えながら、みんなで集中して行うことの大切さを教えます。

POINT 2

学級担任の「考え方」を伝える。

- 朝の会と帰りの会の中には、必ず学級担任から学級の子どもに向けて話す時間を設定します。問題が起こった時やイベントがある時だけではなく、ふだんから学級の成果や課題について子どもたちに語りかけることが必要です。
- 毎日続けることは簡単なことではありませんが、継続することで、子どもは学級担任の話を真剣に聴き、受け止めるようになっていきます。
- 子どもは教師が心を開いた分しか心を開いてはくれません。誠実に向き合い、正直な気持ちで語ることも大切です。

①準備と心構えを

連絡や注意事項を伝えるだけでは、子どもとの心の触れ合いも学級の価値観も生まれません。学級担任だからこそできる、学級の子どもの心にしみる話をしたいものです。そのためには、毎日の準備とふだんからの人間的な関わりが欠かせません。

POINT 3

学級生活を活性化する創意工夫を！

- 子どもが自主的に運営できるようになることを目指します。全員が会の進行役をきちんと果たせるようになることや、子ども同士で当番の確認、係からの連絡・提案などができるようになることで、学級の諸活動がより楽しいものになっていきます。
- 子どものアイデアを生かしたり、一人一人の出番を増やしたりして、互いの良さを認め合う場面をつくることも大事な工夫です。

①せっかく工夫しても・・・

人前に立つことが苦手な子どももいます。もじもじしていたり、わざと手を抜いたりする子どももいます。子どもの出番を増やしても、周りからの“からかい”の対象にしまったのでは、せっかくの工夫もむしろマイナス効果です。やり方を教え、できるまで支援していきましょう。



朝の会・帰りの会の「指導のポイント5か条」

朝の会、帰りの会の「意義」を一言で言うと・・・

<朝の会>は、子どもにその日の目標と見通しを持たせること

<帰りの会>は、その日の頑張りを評価し、明日への希望を持たせること と言えるでしょう。

指導のポイント5か条

- 1 さわやかに一日のスタートを切る朝の会を！
◆まず学級担任自ら「おはよう！」と明るくにこやかに入室しましょう。
- 2 時間通りに始め、時間通りに終わらせる。
◆特に帰りの会は決められた時間に全員がそろうように清掃を終わらせる姿勢が大切です。
- 3 司会(日直)の指導を大切にする。
◆最初は学級担任が手本を示し、司会の重要性和やり方を教えましょう。
- 4 班長からの一日の振り返りは具体的な事実を基に話をさせる。
◆「よかった(悪かった)です」といった具体性のないコメントでは何の前進もありません。
- 5 明日への希望を抱かせる帰りの会を！
◆その日にどんな反省点が出されても、学級担任の話において、最後に「明日への希望をわかせる一言」を入れ、笑顔で「さようなら」の挨拶をしたいものです。

**①ここに注意**

子どもにとっては・・・

- ◆子どもの能力や興味・関心には個人差があるため、授業への意欲が高まらない子どもや学習に対する苦手意識を持っている子どももいます。
- ◆苦手意識が解消されないまま学年が進むと、次第に劣等感を覚え始める子どももいます。
- ◆授業は一日の大半を占めているため、子どもの授業に取り組む姿勢が崩れると、学級の様々な活動に負の影響を及ぼします。

**②ここに注目**

—安定した学級生活のために—

- ◆学校生活の中心は授業です。授業中の指導を通して、様々な力や態度を身に付けていきます。
- ◆本来、どの子どもも「分かるようになりたい」、「できるようになりたい」、「認められたい」という気持ちを持っています。
- ◆授業における教師の確かな指導によって、子どもは学級の仲間と共に学ぶ喜びを味わいながら、学級生活の楽しさを実感していくことができます。

**③空白の時間をつくらない!**

授業中に「空白の時間」ができることで集中した雰囲気や崩してしまうことがあります。また、作業に時間差が生まれることも早く終わった子どもが遊び始める原因となります。例えば、「できた人から持ってきたさい」などの指示を出し、課題の添削のために教師の所に並ばせることは「空白の時間」を生み出し、授業中に必要な緊張感を失くすことにつながります。教師自らが規律の崩れやすい状況を作り出していないか、自己チェックしましょう。

**教師は授業で勝負する!!**

「楽しく分かる授業」は、授業における生徒指導の原点です。授業の本質は、子どもに「分かった」、「できた」、「認められた」という喜びを味わわせているかどうかにあります。そのためにまず必要なのは、日々児童生徒理解に努め、教材研究に勤しみ、教師自身が万全の準備をして、授業に臨むことです。

また、授業とは、子どもの意欲や姿勢も含め、様々な能力や態度を育てる時間ですから、内容を「教える」ことだけでは成り立ちません。集団の中で自分を表現できること、それを先生や友達に認められること、自分の目標を達成できることなど、授業の中で、子どもの様々な欲求を満たして、子ども一人一人を成長させる教師でありたいものです。



ここがポイント

HOW TO

- 定時着席や始業・終業の挨拶を徹底する。
- 学習規律、授業中の約束を整える。
- 共に学び合う集団に育てる。
- 子ども一人一人に学ぶ喜びを与える。

POINT 1

“授業に臨む姿勢”をつくる!

- 定時着席や始業、終業における「締まりのある挨拶」は、学級全体の授業に臨む姿勢をつくります。また、授業と休み時間とのけじめをつける意味でもこの指導は重要です。こうした指導の徹底不足は学級を不安定にすると心得ましょう。
- 私語やノートへの落書き、お手紙書きや居眠りなどを許さない雰囲気づくりが必要です。学習規律については、学年で統一するとともに、年度初めに伝え、随時、徹底を図る必要があります。

①定時開始・定時終了

教師自身も時間を厳守します。授業開始時刻はもちろんのこと、基本的には終了時刻も守らなければなりません。子どもに身に付けさせたいことは、まず自分ができていることが大前提です。

②挨拶のやり直し

挨拶は毎日何回もすることなので、時折いい加減になってしまう子どももいます。度々のやり直しに対しては、担任も抵抗感を感じるかもしれません。しかし、年度途中で指導をゆるめてしまうと、それは子どもにとって「やってもやらなくてもいいこと」になってしまいます。やるといったことは一年間ぶれずに指導することが必要です。

指導に当たっては、元気な挨拶を交わした時の気持ちよさや教室の締まった空気を実感できるようにします。



POINT 2

授業中の約束を徹底し、共に学び合う集団をつくる!

- 「忘れ物をしたらどうするか」、「話の聴き方」、「発表の仕方」、「ノートの取り方」など、授業には様々な約束が必要です。その意義を教え、日々取り組ませながら定着を図ります。また、「できて当たり前」ではなく、褒めて励ましながら指導しましょう。
- 授業の中で互いの良さを認め合い、個々の可能性を発揮できるようにすることは、教科指導が目指すところの一つです。学級とは、友達と関わり合いながら共に学び合う集団であり、授業中の約束は、そうした集団をつくるために欠かすことのできないものです。

POINT 3

一人一人に学ぶ喜びを与える!

- 授業とは、「共に学び合う」ことに大きな意義があります。一方で、学びとは最終的には個人のものであることから、すべての子どもに学ぶ喜びを味わわせることが、教師の重要な役割と言えます。
- そのためには、考えを発表する機会を平等に与えること、そして、その考えや表現などが仲間にも認められるようにすることが必要です。一人一人の成長の機会をいかに作り出すかが教師の「腕の見せ所」です。

③笑いの質を見抜く

授業中に温かい笑いが起きた時は、教師も一緒に笑顔になります。しかし友達の発言を冷やかすような笑いが起こる学級では、学ぶ喜びは味わえません。また、笑う場面ではない時に一部の子どもが「クスクス」や「ニヤニヤ」しているときは、人間関係上の問題が潜んでいる可能性があります。

学校行事

学校行事は、学級内の望ましい人間関係を形成し、集団への所属感や連帯感を深める絶好の機会です。



①ここに注意

子どもにとっては・・・

- ◆学校行事は、非日常的で楽しいイベントの一つです。しかし、自分が苦手とすることに関連した行事の場合は、参加意欲の低い子どももいます。
- ◆順位を伴う行事では、勝敗へのこだわりが、子ども同士の人間関係を不安定にすることもあります。



②ここに注目

—安定した学級生活のために—

- ◆学校行事は、イベントであると同時に集団活動を通して、協働の喜びや達成感を味わう学習です。文化的行事、体育的行事、旅行・集団宿泊的行事はそれを代表するものです。それぞれの目標や特質を十分に理解して子どもの参加体制づくりを工夫します。



ここがポイント

HOW TO

行すべきこと

- 各行事には、それぞれの目標や特質がありますが、いずれの行事も以下の3つのことを大切に取り組んでいくとよいでしょう。

POINT 1 集団の成長を図る。(文化的行事を例に)

- 例えば、小学校の学芸会や中学校の合唱コンクールでは一人一人が役割を分担しながら、全員の協力で一つの作品が完成します。表現することの喜びを体得しながら、協力し合うことのすばらしさを学ぶことができるように指導しましょう。
- 指導に当たっては、みんなで表現を創造する過程で、集団として成長できるように導いていくことが大切です。合唱を例に挙げると、子どもは「合唱」を「学ぶ」のではなく「合唱」で「学ぶ」のです。

①ご褒美＝対価？

子どもは「先生!頑張ったら、ご褒美がありますか?」と言うことがあります。安易に応じないようにしましょう。子どもはそれを対価と受け取ってしまうかもしれません。「結果以上に過程が大切である」ということを実感できるように指導を貫きましょう。

POINT 2 一人一人に目標と役割を持たせる。(体育的行事を例に)

- 例えば、運動会では子ども一人一人に目標を持たせて取り組ませます。また、学級の一員として役割意識を持たせて全体のために積極的に取り組めるように指導しましょう。
- 運動が苦手な子どもの参加意欲を高めるに当たっては、配慮が必要です。勝敗や結果ではなく、「どんなことにどれだけ努力するか」が大切であることを常に伝え、参加意欲を育てていきましょう。
- 頑張っている友達の活動に目を向けることなどの「認め合い、励まし合う姿勢」についても丁寧な指導が必要です。

POINT 3 「全体のためにどうすべきか」を考えさせる。(集団宿泊的行事を例に)

- 例えば、野外活動や修学旅行などの宿泊を伴う行事は、子どもがとても楽しみにしている行事です。しかし、その楽しさを追求するためには、全員の安全や人に迷惑をかけないことなどのルールやマナーが、それ以上に重視されます。集団宿泊的行事は、「全員が安心、安全に活動するためには自分はどう行動したらよいか」ということを考える絶好の機会と言えます。
- 行事を通して、互いを尊重し、誰もが気持ちよく過ごすために必要なルールやマナーについて、じっくりと考えさせ指導していくことは、その後の学校生活にも生きてきます。

教室の環境づくり

教室の環境は、子どもの心を育て、学級に温かさややる気に満ちた雰囲気醸成します。



①ここに注意

子どもにとっては・・・

- ◆集団としての連帯感が低下していると、教室が自分たちにとって大切な生活空間であるという意識も薄れがちです。
- ◆汚れた乱雑な教室は、子どもの学級への帰属意識や諸活動への意欲を低下させるだけでなく、心の荒れを引き起こすことにもつながります。



②ここに注目

—安定した学級生活のために—

- ◆教室の環境整備を行い、学級の物を大切に扱う指導を徹底することで、感謝の心や連帯感を育てることができます。
- ◆子どもの取組が見えるような掲示物を工夫することで、互いの努力を認め合う心を育てることができます。



ここがポイント

HOW TO

行すべきこと

- きめ細やかな環境整備をする。 ●整理整頓の指導を徹底する。
- 子どもの取組が見えるような掲示を心がける。

POINT 1 “いつもきれいな教室”にする。

- 例えば、以下のようなことについて整理整頓の仕方を教え、その都度確認します。全員ができるように繰り返し指導することが大切です。

- ◆机の上の学習用具の置き方 ◆机の中やロッカー内の所有物の置き方
- ◆ファイルや副読本の置き場所や提出物の置き方
- ◆机、椅子の配置(離席の際は必ず椅子を入れることも含めて)

- フックに掛けている物が落ちていたときは誰の物でもすぐに掛けることや、教室にごみが落ちていたら、すぐに拾ってごみ箱に捨てることなど、一人一人が教室の環境を整えていくことの大切さを教えましょう。
- 壁や物品への落書きは、絶対に許してはいけません。

①最初の見逃しから

子どもが「落ち着かない」、「荒れてきた」となるきっかけは、たった1つのごみや1か所の乱れの見逃しや見過ごしと言っても過言ではありません。小さな乱れを見逃さず、いつも一貫した指導をすることが大切です。

POINT 2 子どもたちの姿が見える温かい掲示物を!

- 子ども一人一人の帰属意識や集団としての仲間意識を育むことができるような掲示を心がけます。基本的には、子どもの活動の様子や取組の跡が見える掲示物がよいでしょう。
- 長期間貼りっぱなしにせず、適切な時期のものを掲示するようにしましょう。
- 掲示物の破損やはがれはすぐに直しましょう。また、掲示物へのいたずらは絶対に許さない姿勢を見せます。
- 教室、掲示物を大切にしたいという心を育てるためにも、発達の段階に応じて、子どもに工夫させながら掲示物を作らせることも大切です。



①教室の生き物

教室で生き物を飼ったり、花を飾ったりすることがありますが、水槽の水が汚れていたり、花がしおれたままになっていたりすることがあります。生き物が粗末にされている教室では、命を粗末にしてもいいという教育をしていることにもなります。そんな教室で過ごした子どもは、人間関係にも鈍感で雑になり、いじめの温床にもなりかねません。

休み時間

休み時間に教師が子どもと触れ合うことは、トラブルを予防するだけでなく、子どもと心の通う関係もつくります。



①ここに注意

子どもにとっては・・・

- ◆ある程度自由な時間であるため、素の行動が表出しやすく、怪我やトラブルも起こりやすい時間帯です。
- ◆教師の目から離れやすくなるため、やってはいけないことや学校で認められていないことをやってしまう子どももいます。



②ここに注目

—安定した学級生活のために—

- ◆休み時間の注意深い観察は、問題の早期発見や子どもへの理解の幅を広げることに繋がります。
- ◆教師にとっても授業中よりリラックスした状態で、子どもとの触れ合いや関わりを持つことができるため、子どもとの温かな関係づくりに欠かせない時間です。



ここがポイント

HOW TO

行うべきこと

- 子どもの様子や人間関係を観察する。
- 怪我やトラブル等の未然防止に努める。
- 子どもとの会話や遊びを通して、信頼関係をつくる。

POINT 1 “ここ”を観察する。(観察のポイント)

- 休み時間は、学級の人間関係や子ども一人一人のふだんの様子がよく見えます。学級担任は、「誰が誰と何をして過ごしているのか」などの子どものふだんの姿を把握しておくことが大切です。
- 毎日観察しているといつもと違う様子に早めに気付くことができます。学級担任は、「いつもより表情が暗い」、「今日はみんなから離れて一人である」などの「子どもの変化のサイン」を見逃さないようにしましょう。

①先生は見ていたのに!

先生の前でトラブルが発生したのに、具体的な対応を取らなかったら、子どもは「先生は見ていたのに何もしてくれなかった」という負の印象を強めるでしょう。問題を感じたら、すぐに声をかけるなどの意識と姿勢が必要です。

POINT 2 教師も自分を知ってもらう。

- 時には、教師も子どもと一緒に遊び、一緒に笑いましょう。
- 子どもは場面によっていろいろな表情を持っているので、休み時間は授業中には見えにくい新たな一面を知る機会にもなります。
- 子どもと信頼関係を築くためには、子どものことだけを知ろうとするのではなく、教師自身を子どもに分かってもらうことも必要です。休み時間には、趣味や興味、自分の喜びや悲しみなどを子どもに大いに語るとよいでしょう。

①一日に何人と話していますか?

よく話しかけてくる子どもとばかり話をしてしまうことがあります。「どの子も担任の先生に声をかけてほしいと思っている」ということを忘れないようにしましょう。



①子どもを伸ばす「チャンス相談」

休み時間には、一人でいる子どもを遊びに誘う子どもや日直の仕事を手伝う子どもなど、進んで良い取組をしている子どもを見かけます。良い取組をしている場面を見かけたら声をかけ、心から褒めてあげましょう。心配な子どもに声をかけることだけがチャンス相談ではありません。機会を捉えて、褒めたり励ましたりすることもその一つです。

放課後

教室の様子などから、子どもの実態や心の在り様を見ることがができます。



①ここに注意

子どもにとっては・・・

- ◆最も教師の目が離れてしまう時間帯です。
- ◆この時間帯の子どもの問題行動は、教師が気付きにくいものであるため、発見した時には、大きなトラブルになっていることもあります。



②ここに注目

—安定した学級生活のために—

- ◆全員の下校を確実に見届けることは、問題の未然防止や早期発見に繋がります。
- ◆下校後の教室を見回することで子どもの心の荒れや人間関係上のトラブル等に気付くことがあります。



ここがポイント

HOW TO

行うべきこと

- 全員の下校を確認する。
- 教室や廊下、昇降口などを見回る。
- 教室内の整理整頓を行う。



POINT 1 下校の最終確認を!

- 学校として下校時間をきちんと守らせ、安全に帰宅するように指導します。学級担任は学級の全員が教室から出るまで見守り、責任を持って下校の最終確認を行いましょう。
- 教室を出ても他の教室にいたり、廊下で話をしていたりすることもあります。自分が担当する学年のフロアを見回り、最後に下駄箱の中も確認しましょう。

※中学校においては、決められた時間に、自分の荷物を持って部活動場所に移動するように指導します。

①帰ったはず?

帰ったはず・・・と書いていても校地内に残っていることもあります。教師に無断で残っていた場合は、要注意です。必要に応じて、聞き取りと指導を行い、保護者への連絡も行います。

POINT 2 子どもの実態が見える、放課後の教室。

- 子どもが下校した後は、机や椅子などの教室内の整理整頓をしながら異変がないかを確認します。
- 子どもの様子は、教室の物からよく見えてきます。例えば右に示したような、教室の様々なところを毎日確認し、変化を見逃さないようにしましょう。

<こんなところに異変が・・・>

- ◆机の落書き、机の中身
- ◆黒板への落書き
- ◆掲示物へのいたずら
- ◆カーテンや窓のさん
- ◆掃除用ロッカーの中
- ◆個人用ロッカーの中
- ※下駄箱の中



①係や委員会の仕事で残す際には...

仕事があって教室で子どもが作業をする場合には、予め「誰が残るのか」、「何時まで残るのか」、「誰が終了時の報告をするのか」、「用具や教室の後片付けはどうするのか」などを確認しておきましょう。その際、必ず担当の教師を決めて、常に子どもの様子を把握できる状態にします。また、下校が遅くなりそうな場合には学年主任や管理職に伝えた上で、事前に保護者に連絡をとり、状況によっては、家まで送り届けることも必要です。

定期面談

子どもとの定期面談は、「教師と子どもとの良い人間関係」をつくるきっかけとなる大切な場面です。



①ここに注意

子どもにとっては・・・

- ◆定期面談は、子ども側の必要性から実施するものではないため、教師からどんな話をされるのか、不安を感じていたり、教師と一対一で話をすることに抵抗を感じていたりする場合があります。
- ◆自分の気持ちを聞いてほしいと思っても、教師主導の短時間の面談で済ませられてしまうと、うまく話せないことがあります。



②ここに注目

—安定した学級生活のために—

- ◆定期面談は、教師と子どもが直接対話を始めるきっかけと信頼関係を築く土台をつくる貴重な機会です。
- ◆面談は、子どもが自らの力によって、よりよく成長していく過程を援助する重要な場面です。



ここがポイント

HOW TO

③行うべきこと

- 事前の準備を行う。
- 目的、意義を説明する。
- 信頼関係を築く土台をつくる。

POINT 1 効果を生み出す“念入りな準備と計画”を!

- 事前に「何のために面談を行うのか」を子どもに話しておきます。個に応じた目的もありますが、全体に対して「悩みや問題の有無に関係なく一人一人とゆっくり話す機会としたいこと」、「注意するための時間ではないこと」は、きちんと伝えておきましょう。
- 教科担任や養護教諭からも情報を集め、その子どもの取組の良いところや褒めたいことを最低一つは用意しておきましょう。また、子ども一人一人とどんなテーマでどんな話をすると効果的かを考え、きちんとプランを練っておきます。
- 子どもの問題点がはっきりしている場合は、事前に学年主任や生徒指導担当と打合せを行い、指導の方針を考えておく必要があります。

POINT 2 子どもの信頼を得るような話の聞き方を!

- 教師の価値観で批判や評価をせずに、あるがまま受け入れるようにしましょう(受容)。
- 子どもを「変えよう」とするのではなく、子どもの気持ちを「分かって」として聴きます(傾聴)。また、子どもの感情に寄り添って考える姿勢を大切にします(共感)。
- 言葉以外の次のような様子も「聞いていますよ」のメッセージになります。
 - ◆目線 ◆表情 ◆声のトーンや速さ ◆口調 ◆傾き など



①「先生、秘密だよ・・・」

子どもからの相談で「先生、秘密だよ・・・」と話された場合に、学級担任が一人で抱え込んでしまい、問題が悪化したり、手遅れになったりすることがあります。命や心身への危険性を感じた場合や、問題の解決に教師や保護者などの大人の力が必要であると考えられる場合などには、集団守秘義務の考え方に則り、他の教員との連携が必要になってきます。子どもと友達感覚で秘密を共有することのないよう、日頃から子どもとの適切な距離感覚を身に付けるように意識しましょう。

①不信を招く話の聞き方

例えば教師がPCの画面を見ながら、あるいはペンを指で回しながら話を聞いていたとしたら、子どもはどう感じるでしょうか。

子どもは「この先生は自分の話を真剣に聞いているか」を、教師の様々な様子から感じているのです。

トラブル対応

トラブルは「起こって当然」と心得ます。子どもは失敗しながら成長します。



①ここに注意

子どもにとっては・・・

- ◆何も問題を起こさない子どもは存在しません。
- ◆例えば、「学校生活に必要な物を持ってくる」、「教室にある物を壊す」、「個人の所有物がなくなる」、「喧嘩をする」など、トラブルはいつでもどこでも起こります。



②ここに注目

—安定した学級生活のために—

- ◆子どもたちは失敗を繰り返しながら、物事の善悪や相手の立場に立って自分の行為を見つめることを学んでいきます。
- ◆丁寧に事実確認を行い、公正な判断と教育的愛情を持って指導することが大切です。



ここがポイント

HOW TO

③行うべきこと

- トラブルを想定しておく。
- 子どもを指導し支援する。
- 保護者に連絡し、理解と協力を得る。
- 事実確認し、丁寧に記録する。

POINT 1 まず事実の確認を!

- 子どもから話を聞く際は、“5W1H”を基本に、事実をしっかり確認することが大切です。理由や背景は、事実と分けて聞いていきましょう。可能な限り複数の教師で話を聞くようにします。また、複数の子どもが関わっているときには個別に分けて話を聞き、聞き取った内容を突き合わせます。
- 子どもが最も嫌がることは、教師に一方的に話をされ、自分の話を聞いてもらえないことです。子どもの話は最後まで聴き、トラブルの全体像をつかんでから指導に入ります。

④5W1H

まずは「事実」を確認!

- ①「いつあったの?」
 - ②「どこであったの?」
 - ③「誰がしたの?」
 - ④「何をしたの?」「どのようにしたの?」
 - ⑤「近くにいた人は?」
 - ⑥「なぜしたの?」「なぜ起こったの?」
- 理由・背景はその後!

POINT 2 毅然とした指導と温かい支援を!

- 人の心身を傷つける行為や「してはいけないこと」に対しては、毅然とした態度で指導します。同時に、指導に当たっては教師の人間的な関わりや支援が不可欠です。子どもが自ら行動を改善し成長していけるように支えていくことが大切です。
- 事実や指導の過程について、関係する子どもの家庭へ連絡をします。共に子どもを育てていく姿勢を示し、継続的な励ましをしていきましょう。

①謝罪を急ぐと・・・

謝罪は指導のゴールではありません。子どもが指導に十分納得していないままに、謝罪させることだけを急いしまうと、また同じトラブルが繰り返されてしまうだけでなく、反対に相手との関係を悪化させてしまう恐れがあります。



①一人の判断は危険!～チームで指導に当たる～

自分の学級で起きたトラブルは、学級担任が一人で抱え込んでしまいがちです。特にふだんから自分の指導に従わない子どもであった場合は、どうしても自分自身の責任のように感じてしまいます。しかし、一人ではできることは限られています。学校は組織ですので、学年主任や生徒指導担当などに「報告、連絡、相談」をして、常に「チーム」で対応することを基本とします。

欠席の理由は様々です。欠席した次の日には、不安なく登校できるように子どもの気持ちに配慮することが必要です。



①ここに注意

子どもにとっては・・・

- ◆欠席したことで、その日の学級の様子が気になったり、登校する日の予定や持ち物が分からなかったりするなどの不安を抱えています。
- ◆休んでいる間の学習の進捗や学級の人間関係の変化などを心配していることもあります。



②ここに注目

—安定した学級生活のために—

- ◆欠席した日の学級担任からの電話は子どもにも保護者にも安心感を与えます。
- ◆欠席が学習の遅れなどにつながらないように、登校時のフォロー体制を作っておくことも必要です。



ここがポイント

HOW TO

行うべきこと

- 欠席の連絡を確実に受け取る。
- 欠席した日には必ず家庭に連絡を入れる。
- 登校時のフォロー体制をつくっておく。

POINT 1 その日のうちに必ず連絡と励ましを!

- 子どもが欠席したときには、必ず電話を入れます。まず、保護者から子どもの様子を聞くとともに、その日の学級の様子と明日の予定や持ち物などについて伝えます。子ども本人が電話口に出られる状況であれば、必ず子どもと話をし、励ましの言葉をかけてあげましょう。
- 簡単なようですが、一年間続けることは大変です。しかし、この小さな取組を持続することが、「子ども一人一人を大切にすること」につながります。

①対応は一貫して!

もし、学級担任から連絡をもらえなかったとしたら、その子どもはどんな思いを持つでしょうか。「うっかり」も含め、教師の都合で対応が変わることは避けなければなりません。対応は一貫してこそ、そこに信頼が生まれるのです。

POINT 2 登校時のサポートを!

- 翌日子どもが登校してきたら、声掛けをして様子を確認します。また、休んで学習できなかった内容を指導するなどのフォローも行います。
- 学習のフォロー体制をつくるに当たっては、班を活用して、子ども同士で助け合う関係を築くことにも配慮しましょう。友達の温かなサポートは、欠席時の不安を取り除くだけでなく、学級への愛着も育みます。



①そのうちに連絡が来るだろう・・・は怖い!!

朝、学級に行くと、連絡がないのに登校していない子どもがいることがあります。「そのうち連絡が来るだろう」と思うてしまうことは危険です。登校中に事故に遭っている可能性や、何らかの理由から学校に向かっていない可能性もあります。朝の時点で連絡がないときには、すぐに学校側から家庭に連絡をし、所在の確認をとることが必要です。もし、連絡がつかない場合には、学年主任や管理職に直ちに報告しましょう。

連絡帳は、家庭と学級担任をつなぐ信頼と情報の架け橋です。



保護者にとっては・・・

- ◆学級担任との情報交換を行う上での対話の手段です。
- ◆欠席の連絡や子どもの相談まで、多岐にわたる活用が可能です。



ここがポイント

HOW TO

行うべきこと

- 子どもに学校生活の見通しを持たせる。
- 子どもの学校での様子を家庭に知らせる。
- 保護者と良好な関係を築く。

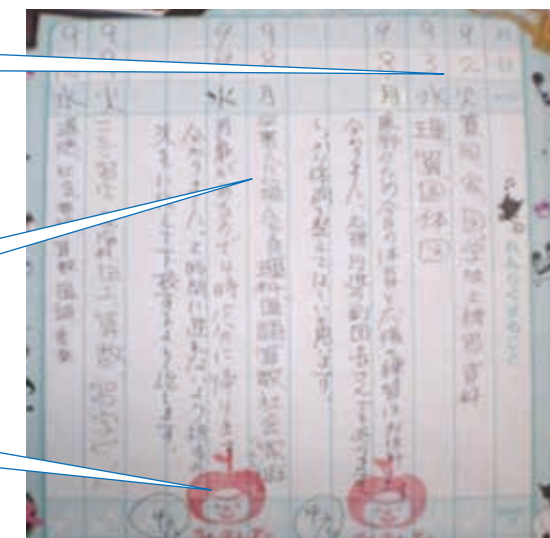
POINT 1 子どもの基本的な生活習慣の確立を目的に!

- 連絡帳をうまく活用することで、子ども自身に書く習慣を身に付けさせることができます。
- 保護者に必ず見てもらい、子どもが自分で学習の準備などができるように協力してもらいます。
- 子どもが書いたメモに必ず保護者と学級担任が目を通して確認印を押すことを徹底させておくと、子どもの学校生活についての共通理解が図られます。

子ども自身も毎日書きます。

家庭と学校との連絡として。

保護者と学級担任の確認印は、子どもに対する「見ていますよ」の合図です。



POINT 2 丁寧な対応と細やかな配慮を!

- 小学校低学年のうちは、保護者からの連絡が多数あります。どんなに忙しくても、丁寧な返答を心掛けましょう。
- 学級担任の判断だけで返答して良いか迷う場合は、主任や管理職に話を通して適切なアドバイスをもらいます。即答できない時は、その旨をしっかりと伝え、後日返答することが賢明です。
- 連絡帳を子どもが自由に見ることができる状態で、机の上に置いたままにすることのないよう注意しましょう。

①連絡帳に書いて大丈夫?

誤解を招きそうな内容を連絡帳で伝えることは避けましょう。事実を正確に伝えるためには、電話もしくは直接会って話します。特に、対人関係のトラブルや怪我、心配されることなどを伝えなければならない時は、放課後など、改めて電話連絡や直接話ができるような段取りを行いましょう。

学級懇談

学級懇談は、学級担任と保護者が、協働して子どもの指導に当たるための、相互理解と信頼関係の構築の場です。



保護者にとっては・・・

- ◆学級担任と顔を合わせて情報を共有できる貴重な機会です。日頃会う機会の少ない保護者同士も情報交換ができる場です。
- ◆保護者は仕事や家事の都合をつけて、時間をつくって参加しています。



ここがポイント

HOW TO

行うべきこと

- 年間の計画を立て、見通しを持つ。
- 事前に話題を整理しておく。
- 保護者との共通理解を図り、信頼関係を築く。
- 資料を準備し教室を整える。

POINT

1 保護者との信頼関係の構築を！

- 学級懇談は年に何回もあるわけではありません。学級経営についての丁寧な説明を心掛け、指導の方針に理解と協力を得られるように努めます。また、一方的に話すのではなく、子どもの成長に向けた保護者との対話を大切に、同歩調がとれるような関係づくりを目指しましょう。
- 学級づくりが上手くいっているときは保護者の協力の必要性をそれほど感じないかもしれませんが、学級づくりが思うようにいかなくなったり、ピンチに陥ったりした時は、やはり保護者の協力の必要性を痛切に感じるものです。日頃の信頼関係がとても大切です。

POINT

2 信頼を得る“事前の準備”を！

- 年度の初回は、必ず学級経営方針を示し、「子どもの成長をどう願い、どのように指導していきたいのか」、学級担任の決意が伝わるようにすることが大切です。「この先生なら任せられる」と思ってもらえるように、話す内容や必要な資料などの準備を整えて臨みましょう。
- 保護者は、学級全体のこと以外にも、我が子の取組に強い関心を持っています。子ども一人一人の作文や感想文、作品など具体的な資料を用意し、子どもの学校での様子を伝えましょう。

① 準備不足は信頼の損失に

「今日はどんなふうに進めましょうか？」などの発言から始める計画性のない進め方をすると、保護者は相当な不信感を抱くことでしょう。保護者は時間のやりくりをして参加していることを忘れてはいけません。



保護者と心を結び合っていくということ

保護者と教師が共に責任を分担しながら、協力し合うことによって、子どもへの教育力は有効に機能します。そのためには、教師も心を開き、保護者と心を結び合っていく必要があります。常に保護者の小さな悩みも真摯に受け止めることはもちろんのこと、先入観を持たず、どの保護者とも一緒にできることがないかを考え、協働していく姿勢を貫くことが大切です。その努力を続けていくことが、真に子どもの成長を願う教師の誠実さと言えます。

家庭訪問

家庭訪問では、保護者との距離を縮め、子どもの成長と一緒に考えます。



保護者にとっては・・・

- ◆学級懇談会で他の保護者の手前話しにくいことも、家庭訪問では本音の部分を話しやすくなります。
- ◆我が子の成長の様子について、具体的で詳細な情報交換ができると期待している保護者もいます。



ここがポイント

HOW TO

行うべきこと

- 目的を明確にする。
- 事前に家庭環境を把握する。
- 子どもについてのエピソードや細やかな情報を整理しておく。

POINT

1 子どもの良さや成長を見つめ、丁寧に伝える。

- 限られた時間内で効率的に情報交換ができるよう、事前に内容を整理しておきます。子どもの良さや成長の様子について具体的な事実やエピソードを語れるようにしておきましょう。
- 子どもにとっては、親を通して自分への良い評価を聞くことは、大きな喜びを感じ、自信につながるものです。そのためにも、教師は日頃から子どもをきちんと見つめることが必要です。

POINT

2 子どもをよりよく知るための機会！

- 家庭訪問は子どもが家庭で見せる顔や親が知っている長所などを知る機会でもあります。教師からの一方的な話にならないよう心がけ、保護者から子どもについての情報を引き出しましょう。
- 家庭の教育方針や幼い頃のことなどは家庭訪問だからこそ聞くことができます。子どもの育ちの背景には親がいます。親から学ぶ姿勢も大切です。

① 公平な訪問を！

保護者間では、教師の対応はよく話題に出ます。滞在時間に大きな差が出ないように注意しましょう。例えば、家庭訪問の後半、時間が無くなり、玄関先で済ませてしまうことのないよう余裕を持った計画を立てます。



① 身だしなみは印象を左右します

清潔感のある髪

資料は鞆に入れて持参する

靴下はふだんは見えないので特に注意！



社会人に相応しい服装

靴は玄関で脱ぐため、注目される！



① 事前の確認と準備を

- 1 家の位置や訪問の順路を確認しておきます。
- 2 前担任からの引継事項や家族構成等を確認しておきます。
- 3 連絡先も確認しておきます。
- 4 長めの移動時間を取ると時間調整ができます。
- 5 苦勞して休みを取り、待っている保護者もいます。万が一遅れそうな時には必ず電話で連絡を入れます。

情報の持ち出しには要注意！

学級通信

学級通信は、子どもに感じてほしいことを意識しながら、保護者に学級の様子を伝える手段です。



保護者にとっては・・・

- ◆学校での我が子の生活や努力の様子を知ること、学校とのつながりを感じ、安心感を得ることができます。
- ◆学級担任の教育観や学級経営方針を知る機会にもなります。



ここがポイント

HOW TO

行うべきこと

- 1年間の見通しを持って発行する。
- 子どもの様子が伝わるように書く。



POINT 1 子ども同士が認め合い、励みとなるものに!

- 学級通信は、子どもも保護者も読めるもので、子どもが互いの努力や成長を認め合い、一人一人の励みとなるような内容を中心にするとういでしょう。
- そのためにも、日頃から子どもと共に活動し、子どもの前向きな取組や学級全体のために行動している子どもの姿を見逃さないようにします。
- 学級開き直後や学校行事の時期に、一人一人の思いや考えを載せることは、互いのことをより知る機会にもなります。
- 一度に載せる情報量は、子どもたちが、配付時に学級通信に目を通すことができるように、適切な分量にしましょう。

❗ 登場回数多くない?

たとえ良い取組であっても、ある特定の子どもことだけを何度も取り上げることはマイナスの効果になることもあります。学級全体と一人一人の成長を考慮して、バランスよく取り上げましょう。



初めの一か月程度は、具体的な発行プランを立てておきましょう!

- 1号は、学級開きに当たって
- 2号は、一人一人の学級への願い
- 3号は、学級組織の紹介と抱負
- 4号は、学級目標の決定と決意
- 5号は、1か月経った学級の様子
- 6号は、最初の学年行事に向けて
- 7号は、・・・



❗ 「見通しのない発行」 えっ・・・3号で終わり?

新年度の始まりに、「毎月発行します!」などと張り切って宣言したものの、年度途中で挫折してしまい、発行を継続できなかったということがあります。それでは相互理解を目指している学級通信で、反対に保護者の信頼を失ってしまうことになるでしょう。どんなタイミングで、どのような内容を取り上げて発行するのか、前もって見通しを持っておくことが必要です。

通信表

所見は、その数行に温かな愛情と期待を込めて書きます。



保護者にとっては・・・

- ◆学校での我が子の様子や成長した姿を知ることができます。
- ◆所見から、学級担任がどのように我が子を理解し、育ててくれているのかを感じています。



ここがポイント

HOW TO

行うべきこと

- 子どもの活動を見る目を養う。
- 日頃から子どもを知ろうとする。
- 具体的な事実を挙げて書く。
- 成長への期待を込めて書く。



POINT 1 学級担任だからこそ書ける心に響く「所見」を!

- 所見は、各教科の評定などからは見えにくい子どもの成長の姿を伝えることを目的として書きます。その子どもの成長にまつわるたくさんの情報の中から、「良いところ」や「さらに伸ばしてほしいところ」を中心に、学級担任が最も伝えたいことを「事実に基づいて」「分かりやすく」記述していきます。
- 所見を書くことは、子ども自らが成長への意欲や自信を高めることもねらいの一つとしていることから、子どもと保護者が、学級担任の温かな愛情と期待を感じとることできるように書きたいものです。
- 子どもと保護者の心に響く所見は、ふだんの学級経営から生まれます。日頃からできるだけ子どもと一緒に活動し、自分自身の子どもを見る目を養っていかうとする姿勢が大切です。

❗ 伝えたいことを書いていますか?

所見の中に「○○係として毎日責任を持って仕事にあたりました」などの型通りの記述を見かけることがあります。保護者は、この言葉に、学級担任の子どもに向けた温かな眼差しと成長を願う思いを感じとることができるでしょうか。

一人一人に所見を書くことは簡単なことではありません。しかし、安易に行を埋めるのではなく、その子どもの成長をしっかり見つめ、それを伝えることのできる教師でありたいものです。



事実を基に、成長の姿を書きます!

<小学校 所見例>

- 壁倒立や側方倒立回転を熱心に練習し、きれいにできるようになりました。「苦手だったけど、やってよかった」という言葉からも分かるように、どんなことにも前向きに取り組んだ一年間でした。
- 学級会などの話し合いの場面において、建設的な意見を積極的に発表し、級友から信頼を得ています。意見が分かれてしまった時には、話し合いの進め方を提案するなど、集団をまとめる力が身に付いてきました。
- どの教科においても、自ら進んで学ぼうとする姿勢が見られました。家庭での自主学習も充実し、興味・関心に基づいた深みのある調べ学習となっています。

<中学校 所見例>

- 4月当初の作文に「2年生では生活のマナーをきちんとしたい」と書いていたように、時間やルールを守り、いつも明るい挨拶ができました。やろうと決めたことを意識して行動に移していたことに精神面での成長を感じています。
- 野外活動や合唱祭では、クラスを支え、活動を盛り上げる存在でした。状況や立場をよく理解し、いつも率先して行動できます。その場面で「やるべきこと」と思うことには、率先して取り組むとともに周りに働きかけることができ、とても頼もしい存在です。
- 行事の振り返りシートには、自分の努力以上に、陰で支えてくれた級友への感謝の言葉をたくさん書いていました。その言葉から、いつも友達の努力に目を向けている心の温かさを感じました。

学校はチームで仕事をしていることを理解し、困った時に同僚から応援してもらえる教師になりましょう。



- ◆学校で気持ちよく仕事ができていますか。
- ◆職員室の人間関係で悩みや不安はありませんか。
- ◆上手くいかないことが多いと感じていませんか。

自分が「誠実に努力すること」、「相手を大切にすること」で、結果として周囲から応援してもらえる教師になります。



②意識すべきこと

- 組織の一員としての自覚を持つ。
- 円滑な人間関係を指導に生かす。
- 情報の交換と共有を行い、教職員の共通理解を図る。

POINT 1 確実に身に付ける!「報告・連絡・相談」。

- 問題やトラブルが起きたら、まずは職員室の先生に(内容によっては管理職に)報告・連絡・相談します。そうすることで、自分の知らない情報や今後予測されるトラブル、対処方法まで、組織として共有することができます。すぐに周囲に相談することは自分の未熟さを露呈することと思わないことです。周囲は「早く知らせてほしい」と思っています。学校はチームであることを忘れてはいけません。

①相談した後は…

子どもや保護者のことで同僚に相談したら、その後の経過や結果について必ず報告をしましょう。相談された側は、その後の対応がうまくいっているのかを気にかけているものです。お礼の意味を込めた報告を忘れないようにしましょう。

POINT 2 日頃から気になる子どもの話題を出しておく。

- 問題が発生した時、日頃から話題に上がる子どもであれば、相談された同僚も全体像を把握しやすくなります。そのトラブルにその子ども特有の背景がある場合は、問題を総括的に捉えやすくなります。「気になる子」は、短所が日頃の話題の中心になりやすいものですが、子どもを多面的に知ることが大切です。授業中の様子や発言、良いところやユニークな行動なども積極的に話題にしましょう。情報交換をこまめに行うことで、周りからの適切な助言や自分の指導への理解も得られるようになります。

①アドバイスを受けにくい先生!?

同僚からのアドバイスをどのように受けているでしょうか。アドバイスに対して、「それは考えていました」、「それはもうやっています」と言ってしまったら、その先にあった有用なアドバイスを聞くことができなくなります。

POINT 3 職種の異なる職員との会話を意識的に増やす。

- 学校職員の多くは教員ですが、ほかに事務職員、技師、図書事務、給食パート、ALT、スクールカウンセラー等、様々な職種や立場の人が協力して教育に当たっています。職種により関わり方が違って、子どもが豊かな学校生活を送れるよう働いています。教職員同士、気心が知れば連絡や調整がスムーズになり、必要な時に必要な対応をしてもらいやすくなります。教師が気付かない子どもの動きや、逆に子どもに気付かせたいことなどの情報を教えてもらうこともあります。これを指導に生かすと、互いの業務が円滑になり、子どもの成長を促すことにつながります。

①周囲から見たらあなたはどんな先生?

社会の常識を教えることも教師の仕事です。常に教育者として相応しい服装や髪型(色)、そして言動に注意しましょう。同僚も保護者も、外部の人も、まず、目に見えるところから、教師としての力量を測ろうとするものです。

年代を越えたすべての学級担任のために

学校は、今、多くの生徒指導上の課題を抱えています。

いじめ、不登校、暴力などの問題行動をはじめ、学ぶ意欲の低下や物事に対する主体性の欠如など、乗り越えなければならない課題がたくさんあります。また、SNS(ソーシャルネットワーキングサービス)などを使った人間関係のトラブルといった、新たな問題も起こっています。

このような様々な課題を克服し、目の前にいる子どもたちを成長させるためには、やはり、「学級づくり」が大事であると考えます。

学級は、子どもにとって、学校生活の拠点です。ここに充実した活動があり、自分の取組を認めてくれる先生や仲間がいれば、どの子どももやる気が湧きます。また、学級に協力体制があり、失敗があっても支え合う仲間がいれば、安心して活動に取り組むことができます。そして、学級の仲間と共に活動する楽しさや喜び、その先にある達成感や成就感を味わうことができれば、どの子どもも自信を持つことができるでしょう。

本冊子は、学級担任をやり抜くための具体のアドバイスを、生徒指導の観点から述べました。学級担任になった若い教師に役立ててもらうことをねらいとして作成しましたが、本冊子の発行が、今改めて、校内で「生徒指導における学級担任の立場と役割の重要性」を見直す機会につながることを願います。

学級担任を一年間やり抜くことは容易なことではありません。しかしながら、様々な課題を克服し、一年間やり抜いた時、子どもたちの成長と子どもたちとの温かな心のつながりを確かに感じる事ができると思います。

それが、学級担任という仕事の醍醐味でもあります。

子どもたちと真摯に向き合い、学級担任という仕事のおもしろさと喜びを味わえる教師でありたいと思います。

対応に困った時にはぜひ活用を！

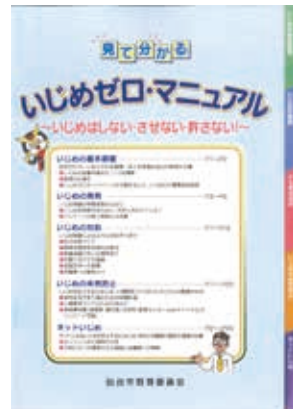
学級でトラブルが無いことにこしたことはありませんが、現実には、いじめや怪我、生徒間のトラブル、保護者とのトラブルなど、様々なトラブルが発生します。どのように対応したらよいのか困ってしまった時には、以下の「見て分かるシリーズ」をご活用ください。きっと具体的な対応のヒントが見つかります。

平成18年度



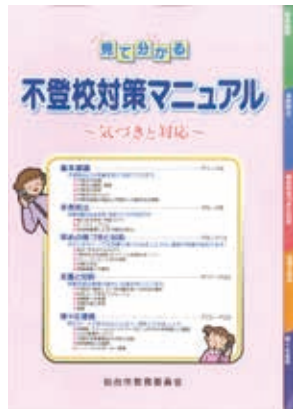
学校事故の未然防止と事故が起きた際の迅速・適切な対応を事例に基づいて紹介

平成19年度



いじめ問題への発見と対応そして、未然防止の適切な対応等を紹介

平成20年度



不登校への基本的対応、学校復帰に向けて必要な支援等を紹介

平成21年度



日常的に起こる学校事故の未然防止とトラブルの防止のための方策や学校の法的責任等に関する知識を紹介

平成22年度



指導困難学校の問題について、兆候をいち早く捉え、未然防止策や効果的な対応策について紹介

平成24年度



東日本大震災発生後、本市の児童生徒の心のケアについて基本認識、具体的対応を紹介

平成25年度



いじめ防止対策推進法の制定を受け、法の主旨や具体的な学校の対応等を未然防止の段階から紹介

平成18年度



教育上特別な配慮が必要な子どもたちの指導について解説

参考・引用文献

- 「生徒指導提要」 文部科学省
- 「小学校学習指導要領解説」特別活動編 文部科学省
- 「中学校学習指導要領解説」特別活動編 文部科学省
- 「生徒指導リーフ」 国立教育政策研究所 生徒指導研究センター
- 「あたたかい人間関係をはぐくむ学級経営」 長野県教育委員会
- 「一人一人を大切に『学級経営』実践の手引き」 岐阜県教育委員会
- 「チェックリスト 学級担任の危機管理」 成瀬 仁 著 教育出版
- 「学級経営 10 の原理・100 の原則」 堀 裕嗣 著 学事出版
- 「生徒指導 10 の原理・100 の原則」 堀 裕嗣 著 学事出版
- 「増補版 学級担任による教育相談の展開」 全国教育研究所連盟 編 全教連叢書
- 「教師の指導力を高める3教室のしつけ入門 基本的生活習慣の形成を目指して」 飯田 稔 編 明治図書
- 「新版 中学校学級担任必携」 萩野 一郎・齋藤 實 共編 文教書院
- 「教職研修総合特集 新学級経営読本 シリーズ9」 教育開発研究所
- 「みんなで目指す学級目標づくりをどう進めるか」 井上 裕吉, 「運動会, 学芸会などの行事への参加体制をどう作るか」 若林 彰)
- 「小学校学級づくりブックレット」 明治図書
 - ① 学級開きと一週間 坂本 光男 編/宮下 順夫 著
 - ⑤ 学級懇談・家庭訪問のしかた 坂本 光男 編/小野 禎和 著
- 「中学校学級づくりブックレット」 明治図書
 - ① 学級開きと一年間の見通し 坂本 光男 編/佐藤 博之 著
 - ⑧ 朝の会・帰りの会のやりかた 坂本 光男 編/岡本 輝昭 著
- 「改訂 生徒指導・教育相談・進路指導」 仙崎 武 野々村新 渡辺三枝子 菊池武烈 編著 田研出版
- 「授業のユニバーサルデザインを目指す『安心』『刺激』でつくる学級経営マニュアル すべての子どもを支える教師の1日」 桂 聖 川上 康則 村田 辰明 編著 東洋館出版社
- 「その指導, 学級崩壊の原因です!『かくれたカリキュラム』発見・改善ガイド」 横藤 雅人 武藤 久慶 共著 明治図書
- 「新任教師のしごと 学級経営の基礎・基本」 執筆 稲田 百合 長津 芳 奥山 文子 小学館
- 「特別活動の教育技術」 杉田 洋 著 小学館
- 「ザ・席替え」 家本 芳郎 著 学事出版
- 「明治・大正・昭和期 宮城県小学校 経営方針 教師心得集」小堀 恒男 編
- 「私の描く教師像」 皇 晃之, 「職業としての教師の受容的態度」 村瀬 隆二)

生徒指導推進委員

委員長	熊谷 祐晃 (仙台市立中野中学校教頭)	副委員長	松川 誠一 (仙台市立南光台小学校教頭)
委員	中廣 和恵 (仙台市立中山小学校教諭)	村井 秀司 (仙台市立将監中学校教諭)	
	高田 勝巳 (仙台市立東六番丁小学校教諭)	佐藤 太郎 (仙台市立東華中学校教諭)	
	山崎 浩之 (仙台市立人來田小学校教諭)	大久保慶隆 (仙台市立茂庭台中学校教諭)	
	菊地 隆夫 (仙台市立桜丘小学校教諭)	鎌田 和之 (仙台市立南吉成中学校教諭)	
	渡辺 綱平 (仙台市立六郷小学校教諭)	上遠野健児 (仙台市立八軒中学校教諭)	
	信太 俊弥 (仙台市立八木山小学校教諭)	千葉 尚子 (仙台市立柳生中学校教諭)	
	高橋真喜子 (仙台市立生田小学校養護教諭)		
	大堀 治子 (仙台市子供相談支援センター主査)	丸山 淳 (仙台市児童相談所主査)	
	菅澤美香子 (特別支援教育課指導主事)	小野寺 淳 (仙台市教育センター指導主事)	

<事務局>教育局 学校教育部 教育相談課

志賀 琢 (課長)	高橋 智男 (主幹兼主任指導主事)	我妻 仁 (主任指導主事)
佐々木 宏 (指導主事)	今野 孝 (指導主事)	山崎 耕平 (主査)
西海枝 恵 (指導主事)	真壁 一也 (指導主事)	

これまでの見て分かるシリーズの詳細については、仙台市教育センター教育相談課のホームページからダウンロードできるようにしています。 <http://www2.sendai-c.ed.jp/~center/>